Kobe University Repository : Kernel

PDF issue: 2025-07-06

ミネルヴァの梟たち ： 夜間中学生の生活と人間発達

浅野, 慎一

(Citation)
神戸大学大学院人間発達環境学研究科研究紀要,6(1):125-145

(Issue Date)
2012-09

(Resource Type)
departmental bulletin paper

(Version)
Version of Record

(JaLCDOI)
https://doi.org/10.24546/81004277

(URL)
https://hdl.handle.net/20.500.14094/81004277

神戸大学大学院人間発達環境学研究科 研究紀要 第6巻 第1号 2012
Bulletin of Graduate School of Human Development and Environment, Kobe University, Vol.6 No.1 2012

研究報告

ミネルヴァの梟たち――夜間中学生の生活と人間発達

The Owls of Minerva: The Students of Junior High Night Schools

浅 野 慎 一*
Sinichi ASANO*

要約：本稿の課題は，夜間中学生の生活と意識の実態をふまえ，その歴史－社会的意義を考察することにある。主な素材は，2011年7～10月に実施したアンケート調査で，全国の夜間中学生・1150名から回答を得た。現代の夜間中学生の最大の特徴は国家・民族を越境したトランス・ナショナリティにあり，彼・彼女らはポスト・コロニアルの現実・矛盾を，その身体・生活・感性で体現している。夜間中学生は，【日本系】，【在日コリアン系】，【中国帰国系】，【新渡日系】の4系に大別され，生活実態はそれぞれ異なる。ただしどの系の生徒も，①識字・日本語の壁，②子供時代から現在に至る経済的貧困，③社会関係の希薄さ・孤立といった問題を抱えている。また彼・彼女らは，極めて多面的・包括的な領域にわたり，普通教育としての夜間中学の意義を高く評価している。夜間中学とその生徒は，地域毎に明確な差異・個性があり，それは日本の経済・社会における地域構造に規定されている。そして今，グローバリゼーションに伴う地域間格差の拡大の下，夜間中学は大きな変動局面にさしかかっている。そこでの教育実践は，日本の義務教育に重要な示唆をもたらし，ポスト・コロニアルの歴史的社会変動・変革へと連鎖している。

「世の中に一人だって見殺しにされていい人類がないと同時に，正しい文化には一人だって置き去りにされていい人類がないのだ」（弁護士・布施辰治）

「あなたがたのうちに，百匹の羊を持っている者がいたとする。その一匹がいなくなったら，九十九匹を野原に残しておいて，いなくなった一匹を見つけるまでは捜し歩かないであろうか。そして見つけたら，喜んで自分の肩に乗せ，家に帰ってきて友人や隣り人を呼び集め，『わたしと一緒に喜んでください。いなくなった羊を見つけましたから』と言うであろう」（ルカ福音書15-4）

序章　はじめに

第1節　課題と方法

本稿の課題は，夜間中学生の生活と意識の実態をふまえ，その歴史－社会的意義を考察することにある。

主な素材は，2011年7～10月に実施したアンケート調査で，全国の公立夜間中学生（30校・1048名）[1]，および自主夜間中学生（10校・102名）[2]，計1150名から回答を得た（表1）[3]。

表1　アンケート協力校一覧

公立	足立区立第四，八王子市立第五，葛飾区立双葉，墨田区立文花，太田区立糀谷，世田谷区立三宿，荒川区立第九，江戸川区立小松川第二，川崎市立西中原，市川市立大洲，京都市立洛友，岸和田市立岸城，大阪市立天王寺・天満・文の里・東生野，堺市立殿馬場，八尾市立八尾，東大阪市立長栄・太平寺，守口市立第三，豊中市立第四，奈良市立春日，天理市立北，橿原市立畝傍，神戸市立丸山（西野分校）・兵庫（北分校），尼崎市立成良（琴城分校），広島市立観音・二葉
自主夜間中学	釧路自主夜間中学「くるかい」，福島に公立夜間中学をつくる会，江東区に夜間中学をつくる会，岩橋夜間中学，南河内（はびきの）自主夜間中学校，丹波・篠山よみかきの会，吉野自主夜間中学，穴生・中学校「夜間学級」，城南中学校「夜間学級」，沖縄珊瑚舎スコーレ夜間中学

注：紙幅の関係上，公立校名称の「中学校」を省略。
資料出所：実態調査より作成。

本調査は，第57回全国夜間中学校研究大会実行委員会の協力を得て各校に依頼した。最も一般的な実施方法は，教室で質問紙を配布し，教諭が質問を読み上げ，説明しながら生徒に記入してもらう形である。夜間中学生には，識字が困難な人も多い。そこで，質問や回答選択肢の読み上げ，補足説明が必要であった。ごく一部だが，障碍等のために生徒が自ら記入できない場合，教諭が生徒から聞き取り，記入したケースもあった。また夜間中学生には，日本語が困難な人も多い。そこで，11ケ国語版（日本語，韓国朝

* 神戸大学大学院人間発達環境学研究科教授

（2012年4月1日　受付
2012年4月23日　受理）

鮮語，中国語，英語，タガログ語，タイ語，ベトナム語，スペイン語，ポルトガル語，ネパール語，アラビア語）の質問紙を使用した。御協力くださった生徒・教諭各位には，特別の謝意を表したい。

なお本調査研究の理論的基礎は，生活過程分析に基づく社会変動論[4]である。これは，生徒諸個人の生活史・生活過程・社会諸関係・社会意識を――学校や教室の内部，学習，学校や教諭との関係に限定せず――，できるだけトータルに把握し，マクロな歴史・社会変動との関連で考察する方法である。夜間中学の生徒を，「学校の生徒」というより，一人の生きた人間として捉え，その「生命＝生活（life）」の発展的再生産と歴史的な社会変動との関連の把握を目指した。

ただし，こうした理論的基礎に立つ場合，インテンシヴな面接聞き取り調査を行い，多岐にわたる質問を臨機応変に重ね合わせ，長時間をかけて質的事実を浮き彫りにすることが一般的である。しかし今回は，生徒の全体像を概括的に把握するため，大量観察のアンケート調査を実施した。質的現実と別れを告げる数量化が孕む限界は避けられない。またアンケート調査では，質問数も限られる。特に前述の如く，夜間中学生には識字が困難な人も多い。そこで，質問は19問に厳選せざるを得なかった。とはいえ，調査設計の理論的基礎が生活過程分析に基づく社会変動論であることは変わらない。

第2節　夜間中学生とは何者か？――ミネルヴァの梟たち

さて，現代の夜間中学生の最大の特徴は，国家・民族を越境したトランス・ナショナリティにある（表2～5）。彼・彼女らの国籍・出生地・言語・自己定義は，それぞれ極めて多様である。アンケート回答者の中でも，日本国籍の生徒は全体の約3割にとどまり，国籍は24カ国に広がっている。出生地も，日本で生まれた生徒は約3割にすぎず，29の国・地域に分散している。最も話しやすい言語も，日本語は4割以下で，27言語に及ぶ。そして自らをどのように定義するか（「日々の住民投票」[5]としてのアイデンティティ）をみても，「日本人」と自己定義する人は3割以下にとどまっている。

これは，単なる多国籍・多文化ではない。生徒一人ひとりの中で，国籍・出生地・言語・自己定義が複雑に錯綜し，一人ひとりがトランス・ナショナルな生活・生き方をしているのである。例えば，在日コリアンや中国帰国者は，韓国朝鮮・中国と日本を越境した固有の人生を歩んできた。日本国籍をもつ日本国民の生徒も，その3割以上は外国生まれだったり，普段は外国語を話していたり，自らを「日本人」と定義していなかったりする（表6）。自らを「日本人」と定義している生徒も，3割以上は外国籍・外国生まれだったり，外国語の方が日本語よりも得意だったりする（表7）。逆に外国籍の生徒も，3割以上が日本生まれだったり，普段は日本語を話していたり，自らを「日本人」と定義していたりする（表8）。「父はフランス人，母はタイ人，私はラオス人」，「中国で57年間，モンゴル民族として育てられ，今は日本国籍の中国帰国者」，「フィリピンから日本に帰化し，自分では日本人と思うが，タガログ語しかできない」等と語る生徒もいれば，「自分でも何人かわからない」，「どこの人かわからないし，どこの人でもいい」という生徒もいる。総じて，「あの人は◇◇人」と単純に決めつけられなくなっているのである。したがって，「日本国民の権利・国民主権」，「民族自決・民族解放」，また何らかの民族文化や国民文化を前提にした「異文化理解・多文化共生」といった理念では，現実の生徒の生活・生き方は捉えきれない。

こうしたトランス・ナショナルな人々は，ポスト・コロニアルの世界史的文脈で生み出された。ここでいうポスト・コロニアルとは，帝国主義・植民地支配を克服した後の世界を指す。20世紀

表2　国籍・出身地・言語・自己定義　（%）

		公立	自主	計
国籍	日本	29.3	70.6	33.0
	その他	68.4	29.4	65.0
出生地	日本	31.0	62.7	33.8
	その他	67.5	35.3	64.6
最も話しやすい言語	日本語	34.6	71.6	37.9
	その他	64.6	28.4	61.4
自己定義	日本人	25.8	63.7	29.1
	その他	71.2	34.3	67.9
計		100.0	100.0	100.0
実人数（人）		1048	102	1150

注：「日本（語・人）」＝日本（語・人）のみ。
紙幅の関係上，「無回答」は表記していない。以下，すべての表で同じ。
話しやすい言語・自己定義は複数回答。
資料出所：実態調査より作成。

表3　国籍

公立	アフガニスタン・インド・インドネシア・シリア・シンガポール・タイ・ネパール・フィリピン・ベトナム・ミャンマー・モンゴル・ラオス・韓国朝鮮・中国・日本・エジプト・アメリカ・エルサルバドル・コロンビア・ブラジル・ペルー・リトアニア・（台湾）
自主	インドネシア・スリランカ・ネパール・バングラデシュ・フィリピン・韓国朝鮮・中国・日本・アメリカ

資料出所：実態調査より作成。

表4　出生地

公立	アフガニスタン・インド・インドネシア・シリア・シンガポール・タイ・ネパール・フィリピン・ベトナム・ミャンマー・モンゴル・ラオス・韓国朝鮮・中国・日本・エジプト・セネガル・アメリカ・エルサルバドル・コロンビア・ニカラグア・ブラジル・ペルー・リトアニア・（台湾）
自主	インドネシア・スリランカ・ネパール・フィリピン・韓国朝鮮・中国・日本・アメリカ・サイパン

資料出所：実態調査より作成。

表5　最も話しやすい言語

公立	アラビア語・ウルドゥー語・スペイン語・タイ語・タガログ語・英語・ビサヤ語・ダリ語・ネパール語・ヒンディー語・フランス語・ベトナム語・ポルトガル語・ミャンマー語・モンゴル語・ラオス語・リトアニア語・韓国朝鮮語・台湾語・広東語・中国語・日本語・インドネシア語・セブアノ語・パシュトー語・ペルシャ語
自主	タガログ語・ネパール語・ベンガル語・英語・韓国朝鮮語中国語・日本語・インドネシア語

資料出所：実態調査より作成。

表6　日本国籍者の出生地・言語・自己定義　（%）

	公立	自主	計
日本・日本語・日本人	60.9	86.1	65.6
トランス・ナショナル	36.2	12.5	31.8
計	100.0	100.0	100.0
実人数（人）	312	72	384

注：日本・日本語・日本人＝出生地・最も話しやすい言語・自己定義がすべて日本（語・人）のみ。
トランス・ナショナル＝上記以外の日本国籍者。
資料出所：実態調査より作成。

表 7　自己定義「日本人」の国籍・出生地・言語　(%)

	公立	自主	計
日本・日本・日本語	58.6	91.2	64.3
トランス・ナショナル	39.5	8.8	34.2
計	100.0	100.0	100.0
実人数（人）	324	68	392

注：日本・日本・日本語＝国籍・出生地・最も話しやすい言語がすべて日本（語）のみ。
トランス・ナショナル＝上記以外の自己定義「日本人」。
資料出所：実態調査より作成。

表 8　外国籍者の出生地・言語・自己定義　(%)

	公立	自主	計
日本・日本語・日本人	36.7	40.0	36.8
その他	60.1	50.0	59.7
計	100.0	100.0	100.0
実人数（人）	717	30	747

注：日本・日本語・日本人＝出生地・最も話しやすい言語・自己定義のいずれかに「日本（語・人）」を含む外国籍者。
その他＝上記以外の外国籍者。
資料出所：実態調査より作成。

中葉以降，人類は，帝国主義・植民地支配を克服し，民族解放・国民主権をほぼ世界中で達成した。ポスト・コロニアル時代の到来である。

しかし，これによって格差・差別，疎外が世界から解消したわけではない。①戦争（東西冷戦，核軍拡競争，国際テロ等），②環境破壊（核汚染，地球温暖化，森林破壊等），③貧困・飢餓（南北格差，失業，ワーキング・プア，難民等），④格差・差別（人種・民族，国籍，性，障碍，所得等），そして⑤様々な人間疎外（いじめ，過労死，自殺，政治的抑圧等）。ポスト・コロニアルの世界には，国境を越えた地球的問題群が，人類共通の解決課題として立ち現れている[6]。

しかも，国民主権・民族自決の貴重な成果だったはずの国民国家は，今やしばしば，①排他的な国益・国民益に固執し，②「非国民＝外国籍者」を主権から排除し，③同化を強制して管理主義・パターナリズムを強化し，④能力主義・競争主義に基づく格差・差別を正当化・拡張するなど，少なくとも部分的には地球的問題群を一層増幅させる役割を果たしている。国籍と能力は，ポスト・コロニアルの差別・排除の最後の境界線である。人権も，国籍と能力によって実質的に線引きされる。総じて，国民主権・民族自決の達成だけでは解決できない問題が現に存在し，それを克服するには国民主権・民族自決をも乗り越えた，まだ見ぬ新たな世界社会の模索が不可欠となっている。この事実が明白に可視化した時代が，ポスト・コロニアル時代にほかならない。

「ミネルヴァの梟は迫りくる夕闇とともにはじめて飛びはじめる」[7]。ヘーゲルのこの言葉は多様に解釈されるが，少なくとも次の 2 点を含意している。①一つの時代が黄昏・終焉を迎えようとする時，人は初めてその全貌を正しく知ることができる。②その際，必要なことは，手垢がついたありきたりの信念・理念を声高に主張することではない。生きた現実をありのままに見据えることだ。人類は今，ポスト・コロニアル時代の黄昏という巨大な歴史の転換期を生きている。夕闇に知を求めて飛ぶ夜間中学生は，ポスト・コロニアルの現実・矛盾を，その身体・生活・感性で体現する「ミネルヴァの梟たち」にほかならない。

第 3 節　ポスト・コロニアルの夜間中学

さて，ポスト・コロニアル時代の起点は地球上の地域毎に異なる。

日本の場合，大日本帝国が崩壊して海外植民地を喪失し，東西冷戦という戦後の枠組みの中でアメリカを盟主とする西側陣営の一員へと包摂されていった1945年～47年が，一つの起点といえるだろう。日本に夜間中学が誕生したのは，まさにその時期であった。

1947年，日本の義務教育が 3 年間延長され，六・三制が施行された。しかし当時，日本には多くの戦災孤児，および一家を養うために働かねばならない児童がおり，新制中学に通えない子供も少なくなかった。こうした現実に直面した一部の中学教師が，自主的に夜間中学を開設した[8]。これに対し，「違法」，「児童労働の容認」との批判が寄せられたが，教師達は「事実は法律に先行する」との信念のもと，教室を続けた。法的には「あってはならない」，しかし現実には「なくてはならない」夜間中学が，こうして誕生したのである。

1949年以降，各地の教育委員会が夜間中学を認可し，公立夜間中学が相次いで設立されていった[9]。1954年には学校数で87校，1955年には生徒数で5208人とそれぞれピークを迎えた。しかし政府・文部省は一貫してその意義を認めず，1966年に行政管理庁は「夜間中学早期廃止」を勧告した。夜間中学を認可した教育委員会も，全国的にみればごく一部にすぎなかった。夜間中学の法的根拠は，公立中学校に設置しうる「二部授業」（学校教育法施行令25条 5 項）であり，その設置は義務ではなく，むしろ都道府県教育委員会に特別の届け出が必要とされてきた。

いわば夜間中学はその発足時から一貫して，義務教育の一環でありながら，国家・行政が掲げる公共性との間に矛盾・緊張関係を孕み続けてきたのである。

とはいえ1960年代半ばまで，夜間中学の生徒は，主に日本人の学齢の長期欠席者，または学齢を超過した若い労働者であった。そこで1950年代前半までは，夜間中学はあくまで六・三制へのスムーズな移行への緊急避難措置とみなされていた。また1950年代後半から60年代半ばまでは，当事者（生徒・教諭）の中で様々な疑問・葛藤が提起されつつも，夜間中学の主な使命が「日本国民の権利としての義務教育の完遂」にあるとの認識は，幅広く共有されていた。夜間中学はいずれ昼間の中学に統合されていくとみなされていたのである。そして現に戦後高度経済成長の中で，夜間中学は学校数・生徒数ともに減少の一途をたどった。1968年には生徒数で416名，1970年には学校数で20校まで落ち込み，夜間中学はその歴史的使命を終えるかに見えた。

しかし1968～69年，日本の夜間中学に，新たな転換期が訪れた[10]。この1968～69年は，地球規模のポスト・コロニアルへの転換期――植民地解放・国民主権確立の時期――でもある[11]。

この時期以降，夜間中学とその生徒は再び急増に転じた。またそれだけでなく，①在日コリアン，②韓国・中国からの引揚帰国者，③障碍者（就学猶予・免除，特殊学級修了者），④不登校経験者等，夜間中学の生徒の質が爆発的に多様化したのである。在日

コリアンの就学は，日本国民の権利論だけでは説明しえない。在日コリアン・中国引揚帰国者の不就学は，戦後補償，つまり東西冷戦・戦後民主主義の下での日本政府の対応に問題があったことをふまえた議論を不可欠とする。障碍者・不登校経験者は，戦後日本の能力主義・管理主義的な義務教育によって排除・疎外されてきた人々であった。こうして夜間中学は，一方で「義務教育の完遂・補償」でありつつも，他方で戦後日本の国民国家や公共性に対する批判・異議申し立てを不可欠の基盤とするようになった。これに伴い，夜間中学の教育も，文部省が定めた画一的な学級編制・教育課程・中学校教科書の内容にとどまらず，識字・日本語，一人ひとりの学習歴・生活の必要に応じた多種多様な内容へと展開していった。

1990年以降，東西冷戦の終焉，グローバリゼーションの進展に伴い，ニュー・カマー（新渡日）の外国人や中国帰国者二世・三世の生徒が増加し，トランス・ナショナル化は一層進んだ。夜間中学生の学習権は，もはや「国民の教育権」・「戦後補償」といった国民国家を前提とした枠組だけでは保障しきれなくなっている。

第４節　夜間中学生の一貫した特徴

以上のように，夜間中学生は，①1945～47年（日本帝国主義の崩壊），および②1968～69年（世界的な民族解放・国民主権の達成）という二重のポスト・コロニアルの現実と矛盾を体現する主体であった。したがって夜間中学のあり方は時期毎に大きく変化したが，同時に次の諸特徴は，1947年から今日まで一貫している。

まず第１は，国家（公共性）と社会（共同性）のせめぎあいの渦中で揺れ動いてきたことである。国家と社会の分裂を前提とする近代[12]において，一方で国家が行う義務教育には国籍・能力・年齢（「学齢」というエイジズム）等による排除がつきまとい，他方で現実の社会には義務教育を必要とする人々がたえず生み出される。そこで夜間中学はつねに，「（法的には）あってはならず，（現実には）なくてはならない」といった，ある種の矛盾を孕まざるを得ない。夜間中学は，国家の側からはしばしば異端視され，縮小・解消を迫られる。逆に社会の側からはその現実的必要――「事実は法律に先行する」――に根ざした維持・拡充の要求と運動が生まれる。また国家の側からは，画一化・同質化を求める公的規制が試みられる。社会の側は，現実と乖離した公的規制に反発しつつ，しかし同時に国家に公的責任を果たすよう求めざるを得ない。直接の設置者である地方自治体は，国家と社会の狭間で多様な対応をとる。入学資格，在籍年齢，教育内容，教員人事，設置形態等をめぐり，国家と社会の間で，また社会の内部でも，様々な葛藤・対立が生まれる。こうして夜間中学は，各地域・各学校毎に極めて多様な個性・特徴をもつことになる。

第２に，夜間中学の生徒は，同質的・画一的な義務教育から何らかの理由で排除された人々である。つまり彼・彼女らは，国家が定めた一定の基準から外れた残余規定であり，必然的にその属性――国籍，言語・文化，能力，身心的特徴，学習歴，年齢等――は多様なものとなる。その意味でも夜間中学は，各地域・各学校毎に多様な個性・特徴をもつ。また夜間中学の生徒は，戦後日本社会におけるマイノリティでもある。彼・彼女らの多くは，学齢期に日本の義務教育から様々な理由で排除され，職業選択でも不利を被り，今日に至るまで低所得である。そこで夜間中学の教育文化は多くの場合，多様なマイノリティ・低所得層の要求と利益を反映したカウンター・カルチャーとなる。画一化・同質化を求める公的規制，および多様性・個性尊重の名の下で拡張される差別・格差の双方に抵抗し，異議申し立てせざるを得ない。

そこで第３に，夜間中学の教育現場，特に生徒と教師の関係には，ある種の理想的教育空間が生まれやすい。夜間中学は義務教育だが，生徒は自らの生活の必要に基づき，自主的・自発的に入学・就学を選択した。それだけに自主的・自発的な不登校・退学も多発しがちだが，登校している以上，夜間中学の生徒は，学ぶ意欲に満ち溢れている。そこで夜間中学には，教師による過剰な管理・強制は不要になる。また夜間中学生にとって，学習は受験・進学のための手段ではなく，それ自体が目的・自己実現になりやすい。そこで夜間中学は，過度の受験競争・詰め込み教育とも距離を保てる。こうした中で，夜間中学の教育現場には感動的な実践・エピソードが生まれやすい。ただし同時に，こうした理想的教育空間を賛美し，そこに教育の原点を見出すといった視点だけでなく，それがあくまで管理主義・能力主義・学習の手段化に彩られた近代教育[13]の存在を前提とし，その中での一種のアジールとして機能しているという構造的現実も見逃してはなるまい。

第１章　夜間中学生の生活実態

では，アンケート調査の結果から，夜間中学生の生活実態をみていこう。

第１節　基本属性と言語環境

夜間中学生は，①現在の国籍，②出身国・地域，③自己定義，④最も話しやすい言語という４つの指標で分析すると，大きく４つの系に分けられる（表９）。

第１は，【日本系】で，全体の24.1％を占める。日本国籍，日本出身で，自らを「日本人」と定義している。60歳以上が83.0％，女性が69.7％と多い。最も話しやすい言語は日本語で，日本語の読み書きは64.3％が「まったく問題ない」または「ふだんの生活では困らない」と感じている。日本人の平均と比べれば，非識字率は極めて高いが，以下に示す他系の生徒に比べれば，言葉の問題は少ないといえよう。

第２は，【在日コリアン系】で，全体の22.7％である。多くは韓国籍または朝鮮籍で，自らを「在日韓国朝鮮人」と定義している。60歳以上が73.2％，女性が92.0％と多い。この中で，64.4％を占める戦前生まれは，約半数が日本で生まれ，最も話しやすい言語が日本語である人が83.3％と多い（表10）。これに対し，戦後生まれは35.2％おり，ほとんどが韓国朝鮮に生まれ，戦後に渡日してきた。79.3％は韓国朝鮮語が最も得意で，日本語の会話に不自由を感じている。日本語の読み書きは，【在日コリアン系】の過半数が「ふだんの生活でも困ることがある」または「まったくできない」と感じている。つまり戦前生まれでは非識字，戦後生まれでは日本語の不自由が問題となっている。

第３は，【中国帰国系】で，全体の19.7％である。10歳代から70

歳以上まで年齢は多様で，男性も41.4%いる。自らを「中国帰国者」と定義し，国籍・出生地はともに中国が多い。ただし，残留孤児など戦前生まれの【中国帰国系】には，日本国籍が70.6%，日本生まれが32.4%，自らを「日本人」と定義する人が50.0%と多い（表11)。そしてそうした戦前生まれの人も含め，一番話しやすい言語は中国語である。日本語は，会話・読み書きとも最も深刻な問題を抱えている。「病院に行った時，医者の話を聞いてもわからない。病状も説明できない」，「日本語ができず，仕事捜しがとても難しい」，「就職の面接の時も，言葉ができない」といった声が多く聞かれる。

そして第4は，【新渡日系】で，全体の33.3%を占める。国籍・出生地・言語は多様だが，中国・中国語がそれぞれ約半数を占めている。自らを「在日外国人」と定義する人が多い。この中で，中国系は40歳未満が60.9%，女性が75.9%と多いが，それ以外の他国系は10歳代が過半数と最も若く，男性も41.8%と多い。また他国系では，自分を「日本人」(28.1%）または「その他」(17.9%）と定義する人，および最も話しやすい言葉として日本語（27.0%）をあげる人も一定の位置を占める。【新渡日系】は子供時代に来日した人が多く，また年齢が若いこともあり，日本語の会話・読み書きは【中国帰国系】に比べれば，若干ましではある。しかしそれでもやはり言葉の問題は深刻で，①日本語も出身国の言葉もどちらも中途半端なセミリンガル，②そのために両親・家族ともコミュニケーションが困難であること，③日常会話はできるが，学習言語力に欠ける問題，そして④非漢字圏出身者の漢字の壁など，固有の問題も多い。「ベトナム語も下手だし，日本語はとてもひどい。だから将来はとても心配だ。ベトナム語も下手なので悲しく，友達も恋人もできない」，「あー漢字，とても難しい。本当に」といった声が聞かれる。

表9　系別・基本属性　(%)

		日本	在日	帰国	新渡 中国	新渡 他国	新渡 小計	計
国籍	日本	97.1	6.9	30.0	5.9	7.7	6.8	33.4
	韓・朝	-	90.8	-	-	-	-	20.6
	中国	-	-	69.6	92.5	-	45.2	28.8
	その他	-	-	-	-	91.3	46.7	15.6
出生地	日本	96.8	35.2	6.6	1.1	6.6	3.9	33.9
	韓・朝	1.4	61.3	-	-	-	-	14.3
	中国	0.4	-	92.1	98.4	-	48.0	34.3
	その他	0.7	-	-	-	92.9	47.5	16.0
自己定義	日本人	97.8	7.7	16.7	4.3	28.1	16.4	34.1
	在日	-	91.6	-	-	-	-	20.8
	帰国者	-	0.4	89.9	-	-	-	17.8
	外国人	-	4.6	0.4	87.7	64.3	75.7	26.3
	その他	-	0.4	0.9	8.6	17.9	13.3	4.7
年齢	70歳～	58.5	49.4	7.0	0.5	0.5	0.5	26.9
	60歳～	24.5	23.8	27.3	7.0	1.0	3.9	18.0
	50歳～	5.1	19.2	14.1	13.9	5.6	9.7	11.6
	40歳～	2.2	3.4	18.5	17.1	10.2	13.6	9.5
	30歳～	0.7	0.8	13.2	12.8	8.7	10.7	6.5
	20歳～	2.2	0.8	11.5	15.5	15.3	15.4	8.1
	10歳～	5.4	2.3	7.9	32.6	56.1	44.6	18.3
性別	男性	30.0	8.0	41.4	24.1	41.8	33.2	28.3
	女性	69.7	92.0	58.1	75.9	58.2	66.8	71.4
言語	日本語	98.2	65.9	18.9	15.5	27.0	21.4	49.5
	韓・朝	-	42.9	1.8	2.1	-	1.0	10.4
	中国語	-	-	94.3	94.1	0.5	46.2	34.0
	その他	-	-	0.9	3.2	97.4	51.4	17.3
日本語読み書き	Ⅰ	21.7	6.1	0.4	1.1	3.6	2.3	7.5
	Ⅱ	42.6	37.5	11.0	19.8	16.3	18.0	27.0
	Ⅲ	27.8	47.5	53.7	52.9	53.1	53.0	45.7
	Ⅳ	2.9	6.1	32.6	23.0	25.0	24.0	16.5
	他	-	-	0.9	-	0.5	0.3	0.3
悩み	日本語	0.7	11.1	58.1	50.3	41.3	45.7	29.4
	識字	22.4	46.0	34.4	21.4	21.9	21.7	29.8
計		100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0
実人数（人）		277	261	227	187	196	383	1150
（%）		24.1	22.7	19.7	16.3	17.0	33.3	100.0

注：系：「日本」＝【日本系】，　「在日」＝【在日コリアン系】
「帰国」＝【中国帰国系】，　「新渡」＝【新渡日系】，
「中国」＝【新渡日系】のうち中国系，　「他国」＝【新渡日系】のうち中国系以外。
「韓・朝」＝韓国朝鮮（語)。　「在日」＝在日韓国朝鮮人。
「帰国者」＝中国帰国者（残留孤児，残留婦人，その家族・親戚)。
「外国人」＝在日外国人。
日本語の読み書き：Ⅰ＝まったく問題ない，Ⅱ＝ふだんの生活では困らない，Ⅲ＝ふだんの生活でも困ることがある，　Ⅳ＝ほとんどできない
悩み：生活上の悩み。「識字」＝日本語の読み書き。
自己評価・言語・悩みは複数回答。
資料出所：実態調査より作成。系確定不能が2名。

第2節　生活史――学齢期における不就学の理由

「子供の頃，なぜ学校に行けなかったのか？」をたずねると，

表10　【在日コリアン系】：世代別特徴　(%)

出生年		戦前	戦後	計
出生地	日本	49.4	9.8	35.2
	韓・朝	46.4	88.0	61.3
最も話しやすい言語	日本語	83.3	33.7	65.9
	韓・朝	23.2	79.3	42.9
日本語読み書き	Ⅰ	8.3	2.2	6.1
	Ⅱ	40.5	31.5	37.5
	Ⅲ	44.0	54.3	47.5
	Ⅳ	5.4	7.6	6.1
計		100.0	100.0	100.0
実人数（人）		168	92	261
（%）		64.4	35.2	100.0

注：日本語読み書き：Ⅰ～Ⅳ＝表9に同じ。
資料出所：実態調査より作成。

表11　【中国帰国系】：世代別特徴　(%)

出生年		戦前	戦後	計
国籍	日本	70.6	22.9	30.0
	中国	29.4	77.1	69.6
出生地	日本	32.4	1.6	6.6
	中国	61.8	97.9	92.1
自己定義	日本人	50.0	10.9	16.7
	帰国者	76.5	92.2	89.9
	在日	2.9	-	0.4
	その他	2.9	0.5	0.9
話しやすい言語	日本語	20.6	18.8	18.9
	中国語	76.5	97.4	94.3
	韓・朝	8.8	0.5	1.8
	その他	2.9	-	0.4
日本語読み書き	Ⅰ	2.9	-	0.4
	Ⅱ	17.6	9.4	11.0
	Ⅲ	50.0	54.7	53.7
	Ⅳ	26.5	33.9	32.6
	その他	-	1.0	0.9
計		100.0	100.0	100.0
実人数（人）		34	192	227
（%）		15.0	84.6	100.0

注：日本語読み書き：Ⅰ～Ⅳ＝表9に同じ。
資料出所：実態調査より作成。

その理由は多岐にわたる（表12）。しかし「経済的に苦しかったから」が35.2%と最も多く，また４つの系の生徒に共通して多くみられる。

【日本系】と【在日コリアン系】では，「経済的に苦しかった」が特に多く，また「戦争のため」，および「仕事の手伝いなどで忙しかった」との理由も一定の位置を占める。ただし，【在日コリアン系】でも戦後生まれでは，「日本に住んでいなかった」との理由が41.3%と最も多く，済州島四・三事件（1948〜54年）や朝鮮戦争（1948〜54年）等，戦後の東西冷戦下での朝鮮半島における政治的混乱・経済的貧困が，不就学に影を落としている（表13）。また【在日コリアン系】では「女の子 (女性) だから」という理由も24.5%と多い。

【中国帰国系】は，「経済的に苦しかった」に加え，「日本に住んでいなかった」が多い。戦前生まれでは，日本の侵略戦争・「満州国」支配等，「戦争のため」という理由もあるが，「経済的に苦しかった」と「日本に住んでいなかった」は，世代を問わず多くみられる（表14）。つまり残留孤児など戦前生まれの人も含め，単に戦争被害だけでなく，戦後の東西冷戦（日中国交断絶）と日本政府の帰国政策の不備[14] のため，中国に残留を余儀なくされ，日本に早期帰国できなかったこと，およびポスト・コロニアルの中国の政治的混乱・経済的貧困――国共内戦（1946〜49年），「大躍進」政策と大飢饉（1958〜61年），文化大革命（1966〜76年）等――が，不就学の大きな理由となっている。「日本人の子供として差別され，学校に行けなかった」，「母が日本人，父が国民党の幹部だったので学校に行けなかった」等の声が聞かれる。

そして【新渡日系】も，「経済的に苦しかった」と「日本に住んでいなかった」が不就学の主な理由となっている。つまり南北格差・グローバリゼーションに基づく貧困である。両親とともに来日する前後，かなり長期にわたって不規則な生活を余儀なくされ，精神的にも不安定になり，不就学に陥りがちである。「ビザ問題で来日が遅れ，母と一緒に母国で待っていたから学校に行けなかった」，「学校の途中で日本に来て，学校をやめた」，「インドの地元には中学校がなかった」等の声がある。またごく一部だが，ベトナム戦争・アフガン紛争・文化大革命等，戦争・政治的混乱による不就学もある。

第３節　生活過程――日常の悩みと雇用・就労状況

さて現在，直面している生活上の悩みは，やはり多岐にわたるが，すべての系に共通して多いのは，「経済的に苦しい」（26.3%），「将来の生活が不安」（25.0%）等，経済的な困難である（表15）。

【日本系】・【在日コリアン系】・【中国帰国系】など高齢層は無職が多く，年金・生活保護等の金額の低さが経済的困難の主な理由である（表16）。また【在日コリアン系】・【中国帰国系】では，年金制度の不備・加入期間不足も，経済的困窮を招いている。「在日は差別のため，年金がもらえず困っています（＊）」，「すこし年金があげてほしいとをもいます。せいかついい国につくりおひてほをしともいます（ママ）（＊）」等の自由記述がある。さらに高齢層では健康問題が，不安を助長している。

これに対し，【新渡日系】・【中国帰国系】など若年層では，無職・失業者も多いが，たとえ働いていても不安定な非正規雇用が圧倒的に多い。低賃金・失業が，経済的困難・不安と直結している。「７月まで働いていた会社が倒産して夜逃げ。給料は６月からもらっていない」，「一番の問題は仕事がないこと。仕事がほしい！家族を助けるために仕事をください！」，「条件のいい仕事はなかなか見つからない。今は仕事が少なく，仕事時間がすごく短いため月給も少なく，経済的に非常に困っている（＊）」等，切実な声が聞かれる。

表12　子供の頃，なぜ学校に行けなかったのか　（MA）（%）

	日本	在日	帰国	新渡			計
				中国	他国	小計	
貧困	43.0	44.8	36.6	22.5	22.4	22.5	35.2
戦争	40.8	39.1	9.3	1.1	3.1	2.1	21.2
手伝い	27.1	29.9	14.1	9.1	10.2	9.7	19.3
日本不在	2.2	28.4	28.2	21.4	36.7	29.2	22.3
近隣なし	5.4	3.8	3.1	2.7	5.1	3.9	4.1
廃止閉鎖	2.2	6.5	4.8	2.7	1.5	2.1	3.7
女子	6.1	24.5	2.6	4.8	0.5	2.6	8.4
親死去	17.3	17.6	4.8	1.6	1.0	1.3	9.6
親の指示	9.7	14.6	2.2	3.7	1.5	2.6	7.0
病気障碍	11.9	6.1	4.4	3.2	0.5	1.8	5.7
不登校	9.0	4.6	0.4	2.7	10.2	6.5	5.5
いじめ	7.6	10.0	4.8	0.5	0.5	0.5	5.2
勉強嫌い	12.3	13.0	9.3	15.5	10.2	12.8	12.0
その他	9.7	5.4	4.0	15.0	11.7	13.3	8.8
計	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0

注：貧困＝経済的に苦しかった。　戦争＝戦争のため。　手伝い＝仕事の手伝いなどで忙しかった。　日本不在＝日本に住んでいなかった。　近隣なし＝家の近くに学校がなかった。　廃止閉鎖＝通っていた学校が途中でなくなった (廃止・閉鎖)。　女子＝女の子（女性）だから。　親死去＝親が亡くなった。　親指示＝親が「学校に行かなくてもいい」と言った。　病気障碍＝病気・障碍があった。　不登校＝昼間の学校で不登校になった。　いじめ＝いじめ・差別があった。　勉強嫌い＝子供のころは勉強が嫌いだった。
資料出所：実態調査より作成。

表13　【在日コリアン系】：子供の頃，なぜ学校に行けなかったのか。　（MA）（%）

出生年	戦前	戦後	計
貧困	47.6	39.1	44.8
戦争	54.8	10.9	39.1
手伝い	35.7	18.5	29.9
日本不在	21.4	41.3	28.4
女の子	26.8	20.7	24.5
いじめ	14.9	1.1	10.0
勉強嫌い	8.9	20.7	13.0
親死去	22.6	8.7	17.6
親の指示	17.3	9.8	14.6
計	100.0	100.0	100.0

注：表12に同じ。　10%未満の項目は不掲載。
資料出所：実態調査より作成。

表14　【中国帰国系】：子供の頃，なぜ学校に行けなかったのか。　（MA）（%）

出生年	戦前	戦後	計
貧困	44.1	35.4	36.6
戦争	44.1	2.6	9.3
手伝い	11.8	14.6	14.1
日本不在	32.4	27.6	28.2
勉強嫌い	-	10.9	9.3
計	100.0	100.0	100.0

注：表12に同じ。　10%未満の項目は不掲載。
資料出所：実態調査より作成。

表15　現在の生活の悩み　（MA）（%）

	日本	在日	帰国	新渡			計
				中国	他国	小計	
貧困	21.3	31.0	24.7	25.1	30.6	27.9	26.3
将来不安	20.9	31.0	25.6	19.8	27.0	23.5	25.0
自分健康	46.6	57.1	26.9	10.2	9.7	9.9	32.8
孤独	9.4	11.1	26.4	18.7	20.9	19.8	16.6
重労働	4.7	1.5	6.6	11.8	10.2	11.0	6.4
仕事ない	8.7	8.4	11.5	19.8	19.9	19.8	12.9
長時労働	1.8	2.3	3.5	2.1	2.0	2.1	2.3
仕事小計	13.4	11.9	19.4	33.2	29.1	31.1	20.1
家族健康	13.0	18.4	8.4	3.7	11.7	7.8	11.6
住宅問題	10.8	15.7	15.0	11.2	10.7	11.0	12.8
子育て	1.1	3.4	5.3	5.9	6.6	6.3	4.2
差別	2.9	5.4	6.6	4.8	3.6	4.2	4.6
習慣	1.1	3.1	15.9	8.0	7.1	7.6	6.6
家族別離	14.8	19.5	8.4	10.2	12.2	11.2	13.4
退屈	7.9	8.4	16.3	16.0	12.2	14.1	11.7
日本語	0.7	11.1	58.1	50.3	41.3	45.7	29.4
識字	22.4	46.0	34.4	21.4	21.9	21.7	29.8
その他	4.7	1.9	3.1	0.5	4.1	2.3	3.0
悩みなし	13.0	5.7	4.4	9.1	10.2	9.7	8 5
計	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0

注：貧困＝経済的に苦しい。　将来不安＝将来の生活が不安。
自分健康＝自分の健康の問題。　孤独＝孤独・寂しい・友達が少ない。
重労働＝仕事がきつい。　仕事ない＝仕事がない・仕事が少ない。　長時労働＝仕事時間が長すぎる。　仕事悩み計＝「仕事きつい」「仕事ない」「長時間労働」，その他の仕事関係の悩み。　家族の健康＝家族の健康や世話の問題。　住宅問題＝住宅の問題（狭い・古いなど）。　子育て問題＝子育ての問題。　差別＝差別されたり，いじめられたりする。　習慣＝日本の生活・習慣になじめない。　家族別離＝家族と離ればなれに暮らしている。　退屈＝楽しみがなくて退屈。　日本語＝言葉（日本語）ができない。　識字＝文字の読み書きができない。　悩みなし＝悩みは何もない。
資料出所：実態調査より作成。

表16　就労状況　（%）

	日本	在日	帰国	新渡			計
				中国	他国	小計	
自営	6.1	7.3	0.4	1.6	1.5	1.6	3.7
正規雇用	1.4	1.1	4.4	1.1	10.2	5.7	3.4
非正規	14.4	16.5	27.3	42.2	46.4	44.4	27.4
無職	72.2	71.6	64.3	50.3	39.3	44.6	61.2
その他	1.4	0.4	-	1.1	1.5	1.3	0.9
計	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0

注：自営＝自営業。　正規雇用＝正社員。　非正規＝臨時雇・パートタイム・アルバイト。　無職＝「家で家事などをしている」・「今，仕事を探している」・「仕事はしていない」の計。
資料出所：実態調査より作成。

第４節　社会諸関係

夜間中学生が保有する社会関係は総じて狭く，家族と夜間中学関係者だけに限定されている。悩みの相談相手・話し相手も，同居・別居の家族以外は，「夜間中学で知り合った友達」と「夜間中学の先生」にほぼ限られている（表17）。夜間中学がなければ，生徒の多くは孤立状態に陥りかねない。

ただし社会関係は，系毎に違いもある。

まず【日本系】は，日本語の読み書きができるので，行政の広報・ポスター・チラシ・新聞等からも夜間中学の情報を得ている（表18）。文字情報は広域的に伝達されるので，【日本系】の生徒の多くは通学に30分以上かかる遠隔地に分散して住んでいる（表19）。近隣との関係は比較的，希薄である。また分散居住・遠距離通学が多いので，学校の友達とも学校外での日常的交際は限られ，学校内でも【日本系】としてまとまることは少ないようである。そこで特に学校の先生との関係を重視している。

これに対し，【在日コリアン系】は，夜間中学の情報を主に近所の人，および近所に住む夜間中学の生徒から入手した。日本語の読み書きが困難なので，文字媒体ではなく，対面関係の口語で情報を得たのである。そこで通学圏も過半数が学校から30分未満と近隣である。いわば【在日コリアン系】は，義務教育未修了者・夜間中学生が多数住む学校周辺のエスニック・コミュニティに集住し，「学校の友達＝地元の友人」という稠密な人間関係の中で暮らしている。近所に，話し相手・相談相手も多い。そこで一方でエスニック・アイデンティティが根強く維持され，他方で交通が便利な学校周辺に住み，高齢層は日本語会話も堪能なので，日本人と接触する機会も多く，開放性も確保されている。

【中国帰国系】は，日本語会話が困難なので，家族をはじめとする中国語話者だけの閉鎖的関係の中で暮らしている。夜間中学の情報も，家族・親戚または中国語を話す夜間中学生から得ている。「まわりはほぼ中国人で，毎日，中国語で話しているから，日本人と接する機会がない」との声も聞かれる。また世代的な棲み分けがみられ，高齢層ほど遠隔地の公営住宅に，若年層ほど職住学が近接した学校の近隣に住んでいる（表20）。それぞれの地域には中国系のエスニック・コミュニティがあるが，しかし高齢層が住む公営住宅はもともと人間関係が希薄な上，【中国帰国系】は日本語の壁もあり，特に孤立しがちである。また若年層は多忙で，自宅・職場・夜間中学の３点を移動する日々である。そこでどちらの世代も「孤独・寂しい。友達が少ない」（26.4%）ことに悩んでいる。「友達がなく，浮草のように根がなく，寂しい。日本語がわからず不自由な生活で，経済的にも苦しい。生活はすべての面で苦しい。いつも居候のように我慢しなければという気持ちが頭を離れない。差別されるのも悲しく，いつも中国のことを思っている（＊）」といった声も聞かれる。

そして【新渡日系】では，通学圏が多様に錯綜し，各エスニック集団毎に，家族単位の小規模なモザイク的棲み分けがなされている。夜間中学の情報も，家族・親戚，および同じエスニック集

表17　悩みの相談相手・話し相手　（MA）（%）

	日本	在日	帰国	新渡			計
				中国	他国	小計	
同居家族	39.7	36.8	55.9	55.1	59.7	57.4	48.1
別居家族	32.9	37.5	26.0	17.1	13.8	15.4	26.7
夜中友達	28.2	35.6	27.3	28.3	23.5	25.8	28.9
夜中先生	41.9	41.8	32.2	19.3	18.4	18.8	32.2
近所の人	15.9	23.4	5.7	3.2	3.6	3.4	11.4
職場仲間	3.6	3.8	2.6	1.6	11.2	6.5	4.4
役所職員	4.0	2.7	5.3	0.5	2.6	1.6	3.1
ボラ	4.0	3.8	1.8	0.5	2.0	1.3	2.6
他の知人	17.0	14.6	8.4	15.0	10.7	12.8	13.4
いない	4.7	2.7	3.5	9.6	6.6	8.1	5.1
悩み 孤独	9.4	11.1	26.4	18.7	20.9	19.8	16.6
計	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0

注：同居家族＝いっしょに住んでいる家族。　別居家族＝別々に住んでいる家族・親戚。　夜中友達＝夜間中学で知りあった友達。　夜中先生＝夜間中学の先生。　職場の仲間＝職場の仲間・上司。　ボラ＝ボランティアの人。　いない＝一人もいない。　「悩み　孤独」＝生活の悩みで「孤独」。
資料出所：実態調査より作成。

表18　夜間中学の情報をどこから入手したか　（MA）（%）

	日本	在日	帰国	新渡			計
				中国	他国	小計	
役所広報	20.9	8.4	4.4	8.6	3.6	6.0	9.8
ポスター	16.2	11.1	3.1	4.3	2.0	3.1	8.1
新聞	9.7	1.9	1.3	0.5	1.0	0.8	3.3
看板	7.9	4.6	1.3	1.6	2.0	1.8	3.8
近所の人	8.7	28.0	12.3	8.0	8.7	8.4	13.7
夜中生徒	15.9	41.0	31.7	25.7	14.8	20.1	26.2
夜中先生	4.0	1.9	4.0	2.1	4.6	3.4	3.3
家族親戚	16.2	15.7	41.9	27.3	24.5	25.8	24.3
職場の人	1.8	2.3	2.2	6.4	5.1	5.7	3.3
役所職員	7.6	2.3	6.6	5.3	8.7	7.0	6.0
ボラ	1.1	1.1	0.4	0.5	5.1	2.9	1.6
テレビ	8.7	3.8	-	-	0.5	0.3	3.0
他の知人	5.4	4.6	7.9	14.4	26.5	20.6	10.8
その他	5.4	2.3	0.4	2.7	4.1	3.4	3.0
計	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0

注：ポスター＝生徒募集のポスター・張り紙・チラシ。　看板＝学校の看板。　ボラ＝ボランティアの人。
資料出所：実態調査より作成。

表19　通学時間（帰宅・片道）　（%）

	日本	在日	帰国	新渡			計
				中国	他国	小計	
60分～	25.6	15.7	30.0	25.7	19.4	22.5	23.1
30分～	36.1	28.7	28.2	39.0	34.7	36.8	33.1
30分未満	35.0	54.4	36.6	34.7	43.4	39.2	41.0
計	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0

資料出所：実態調査より作成。

表20　【中国帰国系】：通学時間 (帰宅・片道)，孤独 (生活の悩み)　（%）

出生年		戦前	1945～	1969～	計
通学時間	60分～	41.2	38.0	14.3	30.0
	30分～	23.5	27.8	31.0	28.2
	30分未満	20.6	29.6	52.4	36.6
悩み	孤独	32.4	22.2	29.8	26.4
計		100.0	100.0	100.0	100.0
実人数（人）		34	108	84	227
(%)		15.0	45.6	37.0	100.0

注：通学時間＝表19と同じ。「悩み　孤独」＝生活の悩みで「孤独」を選択。
資料出所：実態調査より作成。出生年無回答が１名。

団に属する夜間中学生から得た。居住地や職場での関係は希薄で，「孤独・寂しい。友達がいない」（19.8%）と悩む人も多い。「日本での生活は寂しい。初めて日本に来た時，出かけるのも怖かった。もう一年が経ち，だいぶ慣れたが，友達はいない。いても，中国での友達のようにいつも一緒にいられない。みんな仕事や勉強で忙しく，電話連絡もない」，「日本語はわからず，仕事はきつく，生活も苦しく，いじめられて押し潰されたような気持ちになる。何でも自分一人で困難を引き受けなければならず，とても疲れる（＊）」等の声がある。また一部には，「インターネットで中国の友達と悩みの相談」，「フィリピンにいる友達が相談相手」等，国境を越えたインターネット空間に，悩みの相談相手や自分の居場所を見いだしている人もいる。

第５節　小括

以上，夜間中学生の生活実態をみてきた。要約すると，彼・彼女らは【日本系】，【在日コリアン系】，【中国帰国系】，【新渡日系】の４つに大別され，各系の言語環境・生活史・生活過程・社会関係はそれぞれ固有の特徴をもっていた。ただしどの系の生徒も多かれ少なかれ，①識字・日本語の壁，②子供時代から現在に至る経済的貧困，そして③社会関係の希薄さ・孤立といった問題を抱えている。

また戦前生まれの生徒の人生には，日本の侵略戦争・植民地支配が影を落としているが，しかしそうした戦前生まれの人も含め，単に戦争被害だけでなく，ポスト・コロニアルの東西冷戦・南北格差，グローバリゼーションが，不就学・経済的貧困など人生の苦難に多大な影響を与えている。

このことは，夜間中学生にとって，ポスト・コロニアルの歴史－社会認識の獲得が重要であることを示唆している。それは，生徒自身の現在につながる貧困・孤独・疎外が，決して個人の能力不足や選択，単なる運の悪さに起因するものではなく，したがって自分だけの問題でもないという認識に直結し，自信・尊厳の回復や連帯への道を開くからである。現在の歴史教育・平和教育が，帝国主義時代の侵略戦争・民族解放の歴史にとどまらず，ポスト・コロニアル時代の歴史・平和について十分に学べる内容になっているか，生徒の「自分自身の世界を読み取り，歴史をつづる権利」[15] を十分に保障し得ているか，一考に値する論点といえよう。

第２章　夜間中学の意義と課題

では次に，夜間中学が果たしている役割，および直面する課題を明らかにしよう。

第１節　夜間中学の意義

まず生徒が「夜間中学に通ってよかった」と感じていることから，夜間中学が実際に果たしている意義・役割をみる（表21）。

いずれの系の生徒も，極めて多岐にわたる領域で，夜間中学の教育を高く評価している。

すべての系でとりわけ評価が高いのは，①「読み書きができるようになった」（61.7%），および②「仲間・友達ができた」（56.3%）・「いい先生と出会えた」（76.5%）等，新たな社会関係の構築である。前述のように，識字・日本語の壁や，社会関係の希薄さ・孤立に悩む生徒にとって，夜間中学は貴重な役割を果たしている。

特に新たな社会関係の構築という点では，すべての系で，在学年数が長くなるほど，悩みの相談相手・話し相手として夜間中学の先生をあげる人が増加している（表22）。「先生は熱心に面倒をみてくれるし，友達は親切に助け合っている。心からの温かさを感じ，感謝している」，「先生達は皆，親切だ。たくさんの友達とも出会い，私はとても幸せで，彼らに感謝している」，「先生は善意をもって努力し，日常的な問題についても援助・助言してくれる。皆，すばらしい人達だ」，「先生は親切だし，用務員さんも毎日温かいお茶をありがとう。私は夜間中学に入って幸せな時間をすごせた」等，夜間中学での新たな出会いに感動する声は，枚挙に暇がない。

表21　夜間学に通って，よかったと思うこと　（MA）（%）

	日本	在日	帰国	新渡			計
				中国	他国	小計	
識字	57.8	72.4	54.2	57.8	65.8	61.9	61.7
友達	54.2	61.3	53.3	63.1	50.0	56.4	56.3
先生	80.1	85.1	81.5	75.4	55.6	65.3	76.5
計算	40.8	47.5	17.6	17.1	16.3	16.7	29.7
多様科目	53.4	65.5	29.5	40.1	21.4	30.5	43.7
安心質問	56.7	58.6	31.3	32.1	35.7	33.9	44.5
自信	41.5	54.0	35.2	36.4	29.6	32.9	40.3
前向き	54.5	60.2	39.2	39.0	28.6	33.7	45.8
考える	48.0	54.8	18.1	22.5	17.9	20.1	34.3
生きる知	45.5	56.3	26.4	31.0	32.7	31.9	39.6
同じ人	48.0	60.9	32.2	26.2	16.3	21.1	38.9
違う人	60.6	63.2	36.6	48.7	29.1	38.6	49.0
生きがい	50.5	59.8	29.1	32.6	19.9	26.1	40.3
勉強喜び	71.1	78.5	63.4	59.4	55.1	57.2	66.6
行事	54.2	64.8	57.3	53.5	36.2	44.6	53.9
悩み忘れ	44.0	62.5	43.2	43.3	20.9	31.9	43.9
中卒資格	33.9	34.9	14.5	20.9	18.9	19.8	25.7
将来有用	13.0	16.5	16.7	29.4	38.8	34.2	21.7
日本語	14.8	55.6	44.1	62.6	62.8	62.7	45.7
日本社会	32.9	55.2	46.3	47.1	45.4	46.2	45.0
その他	6.1	3.4	0.9	2.1	2.6	2.3	3.2
なし	7.2	-	-	-	-	-	0.2
計	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0

注：識字＝読み書きができるようになった。　友達＝仲間・友達ができた。　いい先生＝いい先生と出会えた。　計算＝計算ができるようになった。　多様科目＝いろいろな科目が学べた。　安心質問＝わからなくても安心してたずねられる。　自信＝自分に自信がもてるようになった。　前向き＝前向きに努力するようになった。　考える＝いろいろなことを，よく考えるようになった。　生きる知＝生きるために必要な知識が学べた。　同じ人＝自分と同じような立場の人と出会えた。　違う人＝自分とは違ういろんな人々と出会えた。　生きがい＝毎日の生きがい・目標ができた。　勉強喜び＝勉強が楽しい。　行事＝学校の行事が楽しい。　悩み忘れ＝勉強していると，悩みを忘れられる。
中卒資格＝中学卒業の資格がとれる。　将来有用＝将来の進学・就職に役に立つ。　日本語＝日本語が学べた。　日本社会＝日本の社会について学べた。　なし＝とくに，よかったことはない。
資料出所：実態調査より作成。

表22　悩みの相談相手・夜間中学先生　（%）

在籍年次		1年	2年	3年以上
日本		42.4	42.2	44.7
在日		34.8	39.2	45.5
帰国		19.1	37.7	40.2
新渡	中国	12.6	23.8	34.3
	他国	15.6	19.1	32.3
	小計	13.9	20.9	33.3
計		22.4	31.7	42.5

資料出所：実態調査より作成。

また，【日本系】・【在日コリアン系】等の高齢層は，特に多くの領域にわたって夜間中学を高く評価している。

すなわち第1の領域は，基礎学力の養成である。「計算ができるようになった」，「いろいろな科目が学べた」，「わからなくても安心してたずねられる」等が，これにあたる。「夜間中学に入る前は自分の名前しか書けなかった。入学して5年目で，やっと小学2年生の算数が少しわかるようになった。国語は，普段使っている言葉の意味がわかるとワクワクする」，「どの授業でも新しいこと，違ったことを学べ，日常生活をより良く送れるような気がする」等の声がある。

第2は，自信・思考力・主体的な生き方の獲得である。具体的には，「自分に自信がもてるようになった」，「前向きに努力するようになった」，「いろいろなことを，よく考えるようになった」，「生きるために必要な知識が学べた」である。「世界が広くなった。夜間中学で勉強したので，読み書きもできるようになり，とても行動範囲が広がった。町内会の行事にも積極的に出るようになった。夜間中学に入学する前は，まわりの話の中に入れず，引っ込みがちだった。隣人との交際も避けていた。今は地域の道路掃除のボランティアにも参加している。もし夜間中学に入学していなければ，暗い人生を歩んでいたと思う。私にとって夜間中学は，かけがえのない必要な学校だ。振り返れば，入学の前と後では雲泥の差だ」，「人間的に明るくなった。幅広く物事が見えるようになった」，「人生，生きていいことの再確認」，「こんなはずではなかったと自分に愛想が尽き，自分自身がいやになることが多い。でも学校にくると楽しい。がんばっていきたいと思える（＊）」，「先生達のおかげで自分に自信がもてるようになってきた。幸せになってくるような気がする（＊）」といった声が聞かれる。

第3は，自己を他者との関係で対象化し，客観的にとらえる社会的視野の獲得である。つまり「自分と同じような立場の人と出会えた」，「自分とは違ういろんな人々と出会えた」である。【日本系】の生徒は，夜間中学に入学する以前，自分と同じような義務教育未修了者との出会い・交流が極めて少なかった。また日本語会話が困難な外国籍者や外国出身者等，自分とは違う人々との交流も限られていた。一方，【在日コリアン系】の生徒は，同じエスニック・コミュニティの，つまり自分と同じような人々との交流はもっていた。しかしそれは対面・口語でのごく身近な範囲にとどまり，またコミュニティの外の自分とは違う人々との交流は限られていた。そこで【日本系】や【在日コリアン系】の生徒達は，夜間中学で「自分と同じような立場の人」や「自分とは違ういろんな人」と出会い，自らを対象化し，捉え直す機会を得たことを高く評価している。

第4は，学ぶこと自体が喜び・自己実現となり，精神的に安定したことである。「毎日の生きがい・目標がもてた」，「勉強が楽しい」，「学校の行事が楽しい」，「勉強していると，悩みを忘れられる」が，これにあたる。「夜間中学に来たのは，本当に幸せなことだ。生まれて初めて幸せな時間をすごせた」，「在日外国人でも，夜間中学では安心していられる。ここは楽しくて充実している」，「勉強が大好きで，学校が一番楽しい。授業が終わり，下校時に電車を降りて銭湯に行くと，今日も幸せだったなぁと思う」等の声が聞かれる。なお高齢層には「中学卒業の資格が取れる」ことを高く評価する声も多いが，これも実用性よりむしろ，達成感・自己実現，剥奪からの回復感と理解すべきであろう。

以上の四つの領域の評価は，若年層でも決して低くない。特に「勉強が楽しい」は，若年層を含むすべての系で多くの生徒が，そう感じている。しかし，高齢層ではとりわけ選択率が高い。高齢層の生徒は，不就学の苦難に長年にわたって耐え続け，ようやく夜間中学にたどりついたため，夜間中学の多様な価値を特に深く実感しているといえよう。また高齢層の生徒は様々な人生体験，およびそれに裏打ちされた豊かな経験知をもつ。一方，学校で身につける学力は，個別具体的な経験を普遍的・社会的な視野や文脈に適切に位置づけ，相対化・対象化しうる理論知である。経験

知だけでは社会的現実に柔軟に対処しえず，しばしば自信の喪失，自己の能力不足や単なる運の悪さといった諦観的認識に陥りがちになる。高齢層の生徒は夜間中学で，自らの経験を客観化・対象化し，経験知と理論知を結合させる。また自分と同じような立場の，あるいは自分と異なる多様な人々との出会いの中で自己を社会的に捉え直す。こうした体験が，彼・彼女らの学ぶ喜び・自己実現となり，自らの自信・思考・主体性へとつながると考えられる。高齢層の生徒にとって，夜間中学での学習は，単に形式的な中学卒の学歴取得や個別の実用的知識の丸暗記ではない。何より普遍的な理論知との出会いであり，それによる生き方・考え方の変化こそが，生徒達に高く評価されているのである[16)]。

一方，【新渡日系】など若年層で特に多いのは，「将来の進学・就職に役立つ」である。若年層は，将来に向けたスタートラインとして夜間中学を高く評価している。「夜間中学は本当に役に立つ。特に日本語が十分でない私達にとって，夜間中学は生活のカギだ。私達の将来を見つけるのに役立つだろう」，「言葉では言い表せないが，たくさんのことを学んだ。将来，日本で暮らすためのいい基礎ができた」，「昔は相当やんちゃをしていたので，今は反省している。この学校を反省する場所にしていきたい。自分の将来に必ず役立つ」等の声が聞かれる。

最後に【日本系】以外のすべての系で，「日本語が学べた」，「日本の社会について学べた」との声も多い。在日外国人・帰国者に対する公的な日本語教育は極めて貧弱であり，民間ボランティアによる日本語教室には時間・施設・人材・資金に多くの限界がある[17)]。もとより夜間中学で学ぶ日本語も，【日本系】以外の生徒の日本での社会生活にとって十分な水準に達しているとはいえない。しかしそれでも高額・有料の民間日本語学校を除けば，夜間中学が現在の日本で最も充実した日本語教育機関であることは，ほぼ間違いない。特に深刻な言葉の壁に悩む【中国帰国系】の生徒からは，「今，私ができる日本語は，すべて夜間中学で学んだものだ（＊）」，「厚生省の帰国者定着促進センターでは50音も覚えられず，民間ボランティアの日本語教室もあまり勉強にならなかった。夜間中学で初めて，よく勉強できている（＊）」といった声が聞かれる。

ただし，夜間中学は決して，日本語だけを学ぶ日本語学校ではない。現に「日本語が学べた」という声は，極めて多領域にわたる肯定的評価の一環にすぎない。また，「日本語が学べた」と語る生徒ほど，他のすべての領域でも夜間中学を高く評価している（表23）。道具的・手段的な日本語の効率的習得というより，むしろ全人格的・多面的な普通教育としての成果が実感されればされるほど，日本語学習の成果もあがっているのである。生徒からは「夜間中学は，日本語を習っているだけでなく，心の中の苦しさを少し緩和できる場所だ。そして命を与える大切な場所だ。夜間中学がなくなれば，命がなくなるような気がする。私にとって夜間中学はとても重要な存在だ（＊）」，「この学校にきてから，私は日本語を学んだだけでなく，いろんな面で変わった（＊）」，「日本語だけではなく，音楽，体育，美術の授業が私達の余暇を豊かにしてくれた。またそれらを通して，日本語に深い興味も湧いてきた。日本の風土人情についてもたくさん勉強になった」等の声がある。

「いろいろな科目が学べた」や「計算ができるようになった」

表23　【日本系】以外の全系：夜間中学に通って，よかったと思うこと

（MA）（%）

日本語	選択	選択なし
識字	75.5	47.4
友達	68.9	42.2
先生	83.3	65.5
計算	34.0	16.3
多様な科目	52.0	26.7
安心聞ける	51.1	27.5
自信	48.0	29.5
前向き	53.0	30.6
よく考える	37.7	20.2
生きる知識	50.1	22.3
同じ人	42.5	27.7
違う人	54.4	34.2
生きがい	45.4	26.4
勉強楽しい	72.0	56.7
行事	60.8	45.3
悩み忘れる	50.9	35.2
中卒資格	29.3	15.0
将来役立つ	30.9	16.1
日本社会	64.1	29.8
計	100.0	100.0
実人数（人）	485	386
（%）	55.7	44.3

注：表21に同じ。　10%未満の項目は不掲載。
資料出所：実態調査より作成。

等，細分化された各専門教科の知識の習得もまた，生徒が「夜間中学に通って，よかった」と実感している内容の，ごく一端にすぎない。むしろこれまでにみた非常に幅広い諸領域が一体化したものが，生徒達が実感している夜間中学の存在意義である。細分化された専門教育やその寄せ集めではなく，普通教育としての役割が，生徒達からは高く評価されている。

いいかえれば，夜間中学では，進学・就職の手段として，限定された道具的・手段的な知識（know how）が効率的・競争主義的に学ばれているわけではない。むしろ，「よりよく生きること・幸福」といった本質的目的そのものを追求する無限の知（know why）が学ばれている。これは，言葉の正しい意味での科学的態度の習得といえる。なぜなら科学とは本来，永遠不変の真理・完璧な正解などでは決してない。それはたゆまず反証され，誤謬を乗り越えていく無限の知的探究にほかならないからである[18)]。

そしてこうした学習は，1990年以降の全国夜間中学校研究大会[19)]でしばしば注目されてきた「ユネスコ学習権宣言」（1985年）の内容とも重なる。「読み書きの権利，問い続け，深く考える権利。想像し，創造する権利。自分自身の世界を読み取り，歴史をつづる権利。あらゆる教育の手だてを得る権利，個人的集団的力量を発達させる権利。生存にとって不可欠の手段」。これらは，国籍・能力の壁を越えた普遍的人権である。生徒達によれば，夜間中学はそれを基本的に実現しているといえよう。

ただし厳密にいえば，生徒達の認識は，こうした人権としての「学習権」より，さらに現実的かつ根底的（ラディカル）であるように思われる。なぜならそれは，夜間中学の意義を近代的権利論の枠内に限定していないからである。もともと人間（ヒト，ホモサピエンス）は，脳（理性・意識）の発達という特殊な進化の道筋をたどったため，すべてを対象化・意識化し，学習を通して生

活を発展的に創造することを宿命づけられた特殊な生物種である。それゆえ人間は自らの「生命＝生活（life)」をも手段化し，疎外し，非人間的な生活を作り出す。しかしそうした非人間的な生活をも対象化し，学習とそれに基づく実践によって改変し，人間性を取り戻そうとするのもまた人間の意識性でしかない[20]。したがって人間は，近代的な学校制度や「学習権」思想が成立するはるか以前から，「学んで＝生きて」きた。ユネスコ学習権宣言は，「学習権なくしては，人間的発達はありえない」と述べるが，ここには近代的な人権論の傲慢さが露呈している。事実は逆で，「人間的発達なくして，学習権はありえない」のである。人権・学習権は，人間的発達が作り出した――近代的な限界・制約に満ちた――暫定的成果の一つにすぎない。そして夜間中学の生徒が追求している人間的発達は，近代的人権・学習権やそれを支える国家の公共性の実現にとどまらない。むしろその権利を生み出し，使いこなし，そしていつか乗り越える，生きた人間の生活実践である。

第２節　夜間中学が直面する課題

では次に，夜間中学が直面する課題，今後の発展方向をみていこう。これについても，生徒達が「夜間中学で，もっとこうしてほしいと思うこと」という質問への回答として示している（表24)。

まずすべての系で共通して多くの生徒があげているのは，次の３つである。

第１は，「夜間中学があることを，もっとたくさんの人に知らせてほしい」(44.5%）である。夜間中学に通うことで悩み・孤立を緩和できるはずの多くの人々が，夜間中学の存在を知らないまま，放置されている現実を，生徒達は熟知している。高齢層の生徒にとってこの要望は，「もっと早く夜間中学にたどりついていれば，違う人生を歩めたのでは？」といった悔しさの表明でもある。さらに学齢期に義務教育を受けられなかった自分達のような人々の存在を，日本社会がもっと認識すべきであるとの主張も含まれる。そしてこの声は，多くの系の生徒において，在籍年数が長くなるほど，ますます多くなっている（表25)。夜間中学を実体験として知れば知るほど，その思いが高まっているのである。

第２は，「中学を卒業した人も，入学させてあげてほしい」(22.4%）である。日本には，実際にはほとんど学校に行っていないのに，卒業証書だけ渡された形式卒業者が多数いる。日本の義務教育を受けていないため，多くの苦難に直面している外国出身者も多い。夜間中学生は，自らの人生を通して，実質的な義務教育・学習の大切さを実感しているからこそ，こうした人々にも入学のチャンスを与えてほしいと願っている。

第３は，「奨学金・就学援助金がほしい」(29.9%）である。生徒には，経済的貧困層が多い。彼・彼女らの学習の維持・発展には，何よりも経済的安定・公的経済支援が必要である。

これらに加え，【日本系】・【在日コリアン系】・【中国帰国系】など高齢層には，「施設（エレベーター・バリアフリー等）をもっと整備してほしい」との要望も一定の位置を占める。

表24　もっとこうしてほしいと思うこと　（MA）(%)

	日本	在日	帰国	新渡			計
				中国	他国	小計	
周知	49.8	60.2	37.9	34.2	33.7	33.9	44.5
中卒受入	25.3	26.1	19.8	23.5	15.8	19.6	22.4
奨学金	26.7	39.8	33.0	26.7	20.9	23.8	29.9
施設	18.1	19.9	13.2	8.6	8.2	8.4	14.3
生活相談	6.9	5.0	9.3	11.8	15.8	13.8	9.2
将来相談	4.0	5.4	8.8	12.8	18.4	15.7	9.2
相談小計	9.4	6.9	13.7	18.7	25.0	21.9	13.9
日語学級	7.2	19.5	34.8	34.2	19.9	26.9	22.0
外語教員	9.7	16.1	17.6	13.4	25.5	19.6	16.0
在学延長	23.1	36.0	33.9	17.6	24.0	20.9	27.4
授業内容	14.8	23.0	15.9	7.5	13.8	10.7	15.6
給食	28.2	39.8	29.1	16.6	10.7	13.6	26.1
先生態度	4.7	7.3	0.9	-	6.1	3.1	4.0
先生増員	14.4	24.5	7.0	4.8	6.1	5.5	12.3
少数学級	1.8	5.4	-	2.1	2.6	2.3	2.4
保健	10.5	13.0	9.3	6.4	6.6	6.5	9.6
交流	12.3	15.3	15.9	14.4	18.9	16.7	15.1
近隣開設	14.4	14.6	17.6	11.2	9.7	10.4	13.7
公立設立	7.2	0.4	-	-	0.5	0.3	1.9
近公小計	19.9	14.6	17.6	11.2	9.7	10.4	15.0
その他	8.7	5.7	6.6	5.9	8.2	7.0	7.0
なし	11.6	3.4	5.3	9.1	8.2	8.6	7.5
計	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0

注：周知＝夜間中学があることを，もっとたくさんの人に知らせてほしい。　中卒受入＝中学を卒業した人も，入学させてあげてほしい。　奨学金＝奨学金・就学援助金がほしい。　施設＝学校の設備を，もっとよくしてほしい（段差をなくす，エレベーターなど)。　生活相談＝仕事や生活のことで，もっと相談にのってほしい。　将来相談＝将来の進学・就職について，もっと相談にのってほしい。　相談小計＝生活相談と将来相談の計。　日語学級＝日本語だけを特別に教えるクラスを作ってほしい。　外語教員＝外国語（いろいろな国の言葉）ができる先生や職員を増やしてほしい。　在学延長＝もっと長く在学できるようにしてほしい。　授業内容＝授業の内容や教え方を，もっとよくしてほしい。　給食＝給食がほしい。　先生態度＝先生の態度を，もっとよくしてほしい。　先生増員＝先生の人数を，もっと増やしてほしい。　少数学級＝クラスの生徒人数をもっと少なくしてほしい。　保健＝保健室や健康相談ができる先生がほしい。　交流＝クラスメートと，もっと友達になれるような交流の場を作ってほしい。　近隣開設＝家や職場の近くに学校を作ってほしい。　公立設立＝公立の夜間中学校を作ってほしい（この選択肢は，自主夜間中学校の質問紙のみ）　近・公計＝近隣開設と公立設立の計。　なし＝特にない。
資料出所：実態調査より作成。

表25　夜間中学があることを，もっとたくさんの人に知らせてほしい。　(%)

在籍年次		1年	2年	3年以上
日本		50.8	51.1	52.8
在日		50.0	54.9	64.7
帰国		35.3	24.6	50.6
新渡	中国	31.1	35.7	40.0
	他国	26.0	42.6	48.4
	小計	28.9	40.0	43.9
計		36.5	41.4	55.1

資料出所：実態調査より作成。

逆に【新渡日系】をはじめとする若年層では，「仕事や生活のことで，もっと相談にのってほしい」，「将来の進学・就職について，もっと相談にのってほしい」といった要望が多い。

そして【日本系】以外のすべての系では，「日本語だけを特別に教えるクラスを作ってほしい」，「外国語ができる先生・職員をもっと増やしてほしい」といった声も多く聞かれる。「仕事と関係する日本語をもっと教えてほしい」，「面接や就職に役立つ日本語会話

の授業をしてほしい」,「習った日本語を実際に応用する授業がほしい。ベトナム語の通訳ができる先生を増やしてほしい」等である。

ただし前述のように，生徒達は，夜間中学を日本語学校とみなしているわけでは決してない。現に，日本語特別クラスの設置を求めている生徒ほど，他のすべての領域についても多くの要望をもっている（表26)。つまり夜間中学を普通教育とみなし，多面的・包括的な期待をもっている生徒ほど，その一環として日本語教育にも大きな期待を寄せているのである。

また日本語特別クラスを特に強く求めている【新渡日系】や【中国帰国系】の生徒の多くは，人生の途中で来日したエスニック・マイノリティであり，グローバル化時代の格差構造によって生み出された低所得層・低学歴者でもある。したがって「日本語を学びさえすれば，日本社会に同化・適応できる」といった個人主義・能力主義的な同化・上昇志向による問題解決には，明らかな限界がある[21)]。夜間中学における日本語教育は，経済格差・差別の社会的・共同的解決と結びつけてなされる必要があり，それゆえにあくまで普通教育・全人格的教育の一環としてなされることが重要であろう。

夜間中学では，生徒がわかりにくい日本語で話しても，教師はそれを無視せず，時間をかけ，丁寧に聞き取ろうとする。また教師が生徒に関心をもち，生徒にとって必要な情報を，できるだけわかりやすい日本語で伝えようと努力する。このような配慮に満ちた関係は，夜間中学入学以前の生徒達の日常生活ではほとんどありえなかったものである。学校外の生徒の生活は，学校内とは比較にならないほど，高い「言葉の壁」(正確には,「言葉の壁」という形をとって現れる「無関心の壁」) によって閉ざされている。教師は，学校で生徒と出会った時，初めて「言葉の壁」に直面する。しかしそれは，生徒の側からみれば，日本社会においてそれまでずっと苦しめられてきた「言葉の壁」がついに崩れ始めた瞬間である。第2章第1節でみたように，生徒は夜間中学の教育，特に「いい先生と出会えた」ことに驚異的ともいえるほど高い評価を示していた。これは決して，夜間中学の教師の日本語教育技術の高さによるものではない。生徒に関心をもち，生徒を理解し，生徒の立場に立って考えようとする教師という日本人――それまで生徒達が体験してきた日本社会では，希有ともいえる日本人――との出会いの感動に由来する高評価であろう。「言葉の壁」は，生徒の言語能力の低さというより，日本社会の無関心によって築かれている。「言葉の壁」を打ち破る教育が，日本語が不自由な生徒だけを対象とした日本語教育ではなく，すべての人々を対象とした全人格的・包括的な普通教育であることは，明らかであろう。

なお,「もっと長く在学できるようにしてほしい」，および「給食がほしい」といった要望も多く聞かれるが，これらについては第3章第5節，第5章第2節で詳しく考察する。

表26　【日本系】以外の全系：もっとこうしてほしいと思うこと
（MA）（%）

日語学級	選択	非選択
周知	48.5	40.8
中卒受入	30.0	18.5
奨学金	36.5	29.0
施設	16.7	11.8
生活相談	18.5	6.9
将来相談	15.5	9.1
相談小計	23.6	12.2
外語教員	27.0	14.7
在学延長	33.0	27.3
授業内容	26.2	11.9
給食	30.9	23.5
先生増員	14.2	10.7
保健	16.3	6.6
交流	22.7	13.6
近隣開設	18.9	11.6
計	100.0	100.0

注：表24と同じ。　10%未満の項目は不掲載。
資料出所：実態調査より作成。

第3節　小括

以上，生徒からみた夜間中学の意義と課題を述べてきた。要約すると，生徒達は，極めて多面的・包括的な領域にわたって，普通教育としての夜間中学の意義を高く評価していた。だからこそ，自分自身の利益だけでなく，まだ夜間中学を知らないで放置されている人，および形式卒業者・経済的貧困層にも，夜間中学で実質的な学習機会を与えてほしいと強く願っていた。

また，生徒達が指摘する「夜間中学で学んでよかったこと」や「もっとこうしてほしいこと」は，日本語教育に関わる要素を除けば，どれもすべての系に共通するか，または人が誰しも経験する年齢差によって異なるものであった。つまり，国籍・民族の違いを越えた，人間として普遍的な発達要求に根ざす喜びであり，要望である。

もちろん異文化理解・多文化共生や，それらを促す教育が必要な局面もありうる。しかし生徒達は，特定の民族文化・国民文化の担い手である以前に，まずは一人の生きた人間である。幸福を追求する当たり前の人間として，既存の文化を変革し，新たな文化を創造する主体である。したがって，既存の民族文化・国民文化を前提とした異文化理解・多文化共生といった理念では，生徒の生活・生き方は捉えきれない[22)]。夜間中学が，異文化としての日本語を教える日本語学校ではなく，あくまで全人格的・普遍的な人間発達を保障する普通教育であり，その学習権を国家・行政が責任をもって保障する義務教育であることの重要性も，そこにあるといえよう。

また日本語教育に関わる要素も，それを他の要素から切り離して捉えるのではなく，あくまで普通教育の一環と位置づけることが,「言葉の壁」を打破する上でも決定的に重要である。

第3章　夜間中学生の将来展望と不安

では次に，夜間中学生の将来展望・不安について，みていく（表27-30)。

ここでもまた，系の違いを越えた共通性，および年齢差は明らかである。

表27　夜間中学卒業後の展望　（MA）（%）

		日本	在日	帰国	新渡			計
					中国	他国	小計	
進学	夜高	24.5	26.8	17.2	24.6	42.9	33.9	26.8
	昼高	6.1	3.4	5.3	21.9	15.3	18.5	9.5
	専学	5.4	6.5	9.3	8.0	10.7	9.4	7.7
	他	0.7	-	-	0.5	-	0.3	0.3
	小計	31.0	32.2	27.8	47.1	60.7	54.0	38.3
就職		4.7	3.4	18.9	22.5	31.1	26.9	14.6
識字日語		24.9	33.3	26.9	20.3	15.3	17.8	24.8
在学延期		27.1	37.9	32.2	21.9	7.7	14.6	26.4
活動参加		10.1	14.6	4.4	6.4	4.6	5.5	8.4
何もなし		8.7	6.5	1.8	2.1	0.5	1.3	4.3
外国へ		0.7	2.7	2.2	7.5	8.2	7.8	3.8
未定		21.7	16.1	11.5	12.8	13.8	13.3	15.6
その他		2.5	1.1	0.4	3.2	3.1	3.1	2.0
計		100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0

注：識字・日語＝読み書きなどが学べる教室・場所に通いたい（識字・日本語教室など）。　在学延期＝できるだけ卒業せず，夜間中学で学びたい。　活動参加＝何かの活動に参加したい。　何もなし＝とくに何もしない。　外国へ＝日本以外の国に帰りたい。　未定＝まだ決まっていない。
資料出所：実態調査より作成

表28　夜間中学卒業後の展望　（MA）（%）

年齢		60歳～	50歳～	40歳～	30歳～	20歳～	10歳～
進学	夜高	20.2	30.8	27.5	26.7	33.3	36.2
	専学	3.9	10.5	11.9	17.3	15.1	7.1
	他	0.2	-	0.9	-	-	0.5
	小計	23.1	37.6	36.7	36.0	47.3	73.3
就職		2.1	9.8	25.7	34.7	36.6	26.2
識字・日語		28.7	34.6	30.3	25.3	20.4	8.6
在学延期		35.1	28.6	41.3	20.0	12.9	4.3
活動参加		10.1	15.0	8.3	5.3	4.3	3.3
未定		17.8	12.0	14.7	16.0	18.3	11.4
計		100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0

注：表27に同じ。　10%未満の項目は不掲載。
資料出所：実態調査より作成。

表29　夜間中学卒業後の不安　（MA）（%）

	日本	在日	帰国	新渡			計
				中国	他国	小計	
進学困難	13.0	13.0	7.5	23.0	33.7	28.5	17.0
就職困難	4.3	1.5	16.3	17.1	13.3	15.1	9.7
日語不学	3.6	22.6	41.4	33.2	17.9	25.3	22.6
独力不安	18.1	21.8	15.4	18.2	10.7	14.4	17.1
相談相手	10.1	13.0	11.5	8.0	13.3	10.7	11.2
生きがい	15.9	22.2	9.7	7.5	1.5	4.4	12.3
勉強場所	26.0	30.7	34.8	21.9	7.7	14.6	25.0
結婚困難	1.8	0.4	0.4	1.6	1.0	1.3	1.0
その他	2.9	1.9	1.3	0.5	3.6	2.1	2.1
なし	15.9	16.5	11.0	14.4	19.4	17.0	15.6
計	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0

注：進学困難＝進学が難しい。　就職困難＝就職が難しい。
日語不学＝日本語が学べなくなる。　独力不安＝自分だけでがんばっていけるかどうか不安。　相談相手＝友達・相談相手がいなくなる。　生きがい＝生きがい・目標がなくなる。　勉強場所＝勉強する場所がなくなる。　結婚困難＝結婚が難しい。　なし＝不安は何もない。
資料出所：実態調査より作成。系が不明が２名。

表30　夜間中学卒業後の不安　（MA）（%）

年齢	60歳～	50歳～	40歳～	30歳～	20歳～	10歳～
進学困難	9.3	16.5	8.3	5.3	20.4	42.4
就職困難	1.4	6.0	16.5	30.7	26.9	14.3
日語不学	13.6	34.6	44.0	45.3	38.7	11.9
独力不安	18.0	18.8	16.5	13.3	17.2	15.7
相談相手	11.4	6.8	6.4	10.7	10.8	16.7
生きがい	20.2	12.0	7.3	5.3	3.2	2.9
勉強場所	28.5	31.6	35.8	28.0	23.7	7.6
なし	14.9	15.0	13.8	5.3	10.8	23.3
計	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0

注：表29に同じ。10%未満の項目は不掲載。
資料：実態調査より作成。

第１節　進学

まず，夜間中学を卒業後，38.3%の生徒が進学を希望している。主な進学希望先は夜間高校だが，昼間の高校・専門学校も一定の位置を占める。10歳代では73.3%が進学を，40.0%が昼間の高校に進学を望んでいる。また50歳代でも37.6%，60歳以上でも23.1%が進学を希望している。

今後，夜間中学では進学指導，高校・専門学校との連携，進学先の学費減免・奨学金拡充等が，ますます重要な課題になると思われる。特に10歳代の生徒では42.4%が卒業後，「進学が難しい」ことに不安を感じている。年齢・世代を問わず，進学したいが，経済的・学力的に困難と悩む声は多く聞かれる。「高校で勉強したいけれど，フィリピンにお金を送るため，１年間は仕事をしなければならない」，「高校に行きたいが，父が定職につかず，生活が大変なので迷っている。卒業すると29歳になってしまうので不安だ。高校の勉強についていけるのかも不安」，「日本の入学試験のシステムがわからない。どうすれば高校や大学に入れるのか。学校毎にレベルも違うのか」，「昼間の高校に進学したいが，自信がない。もし入学できなかったら，もう勉強ができなくなる。受験まであと半年しかないから，とても不安だ」，「高校・大学で学びたいが，微々たる年金で生活しているので，経済的に無理だ。国や政治家の人々は，勉強したい人に経済的なバックアップをしてほしい」，「高校進学は，経済的に難しい。奨学金があればいい」等である。

第２節　就職・経済的安定

一方，卒業後，就職を希望する生徒は14.6%であまり多くない。なぜなら，高齢層は就職がもともと困難である。また若年層は進学希望が多い上，不安定な非正規雇用ではあっても，一応，すでに就職しているからである。

しかしそれでも，働き盛りの50歳未満の世代では，「就職したい」との声は一定の位置を占めている。特に就職を切実に求めている20～30歳代では，卒業後，「就職が難しい」との悩みも多い。「就職のチャンスを与えてほしい。お願いします！」，「障碍があっても一般の会社で働きたい。自立した生活がしたい」，「そんなに日本語が上手ではないが，勇気を出していい仕事をみつけたい」といった声が聞かれる。

実際，もし「夜間中学を卒業すれば，就職・転職に有利」という状況になれば，おそらく若年層の生徒・入学希望者は激増するだろう。それは何ら不思議ではない。人間の生活の必要において，

経済的安定は最も基礎的な要素の一つであり，それを求めるのは人間として当然である。特に経済的貧困の渦中におかれている人々にとって，それは「生命＝生活（life)」の根本に関わる最も切実な課題であり，まさに昨今の学校教育で重視・称揚されている「生きる力」の基本であろう。「生きる力」の教育がこうした課題・要望に応えられるものでないなら，それは現実と乖離した机上の空論といわざるを得ない。

なお，「夜間中学を卒業すれば，就職・転職に有利」という状態を創り出すことは，教員定員増等の必要な態勢さえ整えれば，十分に可能であろう。もちろん不況の現下，夜間中学の卒業予定者に安定した正社員としての就職先を確保することは容易ではない。しかし，生徒達の現在の勤務先よりも相対的に安定した就職・転職先の開拓は，必ずしも不可能ではない。なぜなら，雇用する側の立場に立っても，「何の身元保証もなく，ポッッと面接にくる若い外国人」より，「学校・先生の後ろ盾・身元保証のある若い外国人」を雇う方がずっと安心だからである。

第３節　言語（識字・日本語）

卒業後，「読み書き等が学べる教室・場所（識字・日本語教室等）に通いたい」との声も，【日本系】を含め，すべての系に共通して見られる。20歳以上の生徒では，特にこの要望が多い。

ただし実際には第２章第１節で述べたように，こうした教室は少ない。またあっても昼間の開講が多いので，仕事をもつ若年層は通えない。【日本系】以外の働き盛りの世代（20～50歳代）では，「卒業後，日本語が学べなくなる」といった不安が多く聞かれる。

第４節　社会関係・支援

卒業後，「自分だけでがんばっていけるかどうか不安」(17.1%)，「相談相手・友達がいなくなることが不安」(11.2%）との声も，すべての系・すべての世代から聞かれる。夜間中学は，前向きに生きようとする生徒を励まし，支えており，グローバル化する日本社会の秩序維持・社会解体を防ぐ「最後の砦」としての役割を果たしている。生徒達は前述のごとく，家族以外の社会関係が極めて希薄なので，こうした夜間中学が果たしている役割は，他の社会諸関係では代替できない。

第５節　在学・修学年限の延長

総じて生徒達は，進学する以外には，卒業後の明確な将来・進路を見いだしにくい現状にある。そこで特に40歳以上の中高年層を中心に，「できるだけ卒業せず，夜間中学で学びたい」(26.4%）との声も少なくない。学力や経済的な理由で，卒業後，直ちに進学が難しい場合，なおさらである。

実際，生徒達の中には小学校にも通えず，夜間中学で基礎的な読み書き・計算など小学校レベルの基礎学力から習得していかなければならない人も多い。【日本系】や【在日コリアン系】など高齢層の生徒は，学習に必要な記憶力や理解力，体力等の衰えに悩んでいる。【中国帰国系】や【新渡日系】など若年層の多くは，日本語のハンディを抱えている上，仕事・育児等と勉学を両立させなければならない。これらの諸事情をふまえれば，日本に生まれ育った学齢の児童を基準として定められた通常の義務教育年限――しかも中学校に限ればわずか３年間――で，夜間中学の生徒が義務教育修了の学習レベルに到達することは，常識的に考えて不可能といわざるを得ない。生徒の実情に応じた，長期間・多様・柔軟な就学年限の設定が不可欠であろう。「70歳になって勉強をしても，覚える後から忘れることが多く，何度もくじけそうになり，何度も泣いた。もう少し在学させてほしい」，「最低でも小学６年生が習う算数や国語がわかるようになりたい。義務教育の９年間は勉強したい」，「年老いてからの学校は，物忘れが激しく，十覚えても八忘れる。でも残りの二を覚えて，何回も何回も繰り返しを積み重ねているうちに，ようやく若い人に追いつける。だから３年で卒業ではなく，せめて９～10年で卒業というのが，理にかなっている（＊)」，「戦争のせいで，私達は50～60歳になってようやく日本に帰ってきた。あいうえおから勉強しなければならない。子供と同じようなペースでは卒業できない。だから在学期間を延長してほしい」，「年を取ってから祖国（日本）に帰国できたが，自分が納得できるレベルの日本語，たとえば病院で痛みを説明できるくらいの日本語を身につけてから卒業したいので，勉強期間の延長をお願いしたい」，「中国でも学校に行けず，漢字の読み書きができない。だから日本語の読み書きを学ぶのもスムーズに進まない。年だから記憶力も衰えている。普通の日本人の中学生なら３年間で学べても，私にはとても無理だ（＊)」等，在学延長を求める声は切実である。

また中高年層には，夜間中学を「人生でようやくたどりついた学びの場」と位置づけている人も多く，卒業したら「勉強できる場所がなくなる」、「生きがいがなくなる」といった不安も大きい。「入学した最初の日は，心から泣けた。あまりにもありがたくて。本当に遅かったが，良いところを見つけたと思う。でも身体がよくない。休む日が多い。一生懸命学ぼうと思うが，この年齢なので思うように動けない。卒業したら勉強の場がなくなってしまう」，「人生の晩年になって，ようやくたどりついた学校。わずか３年間で卒業は，あまりに厳しい（＊)」といった声が聞かれる。

第４章　夜間中学にみる多様性と共通性

さて，ここまではアンケート結果を一括して分析・考察してきた。しかし，夜間中学には公立・自主の違いがあり，地域的にも多様な個性がある。その点に注目して，さらに分析を深めよう。

第１節　地域的偏在

まず，地域的偏在である（表31)。

2011年現在，公立夜間中学は，全国の８都府県（東京・神奈川・千葉・大阪・京都・奈良・兵庫・広島）に計35校しかない。近畿圏と首都圏に集中し，それ以外は広島県にしか設置されていない。一方，自主夜間中学は，北海道から沖縄まで全国各地に幅広く分散している。こうした自主夜間中学の存在は，夜間中学を必要とする人々が，全国各地にいることの何よりの証だが，そうした人々の学習機会は，公的には保障されていない。そこで自主夜間中学

表31　公立・自主別，夜間中学所在地　（校）

	公立	自主
首都圏	15	5
近畿圏	18	11
中四国	2	1
九州沖縄	-	7
中部	-	2
東北	-	1
北海道	-	5
計	35	32

注：自主は『2011年度　第57回　全国夜間中学校研究大会　大会資料』60頁に「関係諸グループ」として掲載されているグループ。
資料出所：『2011年度　第57回　全国夜間中学校研究大会　大会資料』より作成。

の生徒からは，「公立中学を設立してほしい」，「家や職場の近くに学校を作ってほしい」（計33.3%）といった声が，特に多く聞かれる（表36）。「江東区に夜間中学を作ってください」，「公立夜間中学に通いたい。卒業証書を持って死にたい」，「八重山諸島にも夜間中学を作ってほしい。八重山には学校に行かなかった大人がたくさんいます」等である。なお政府は，義務教育未修了者の人数を把握していない。全国夜間中学校研究会は，それを百数十万人と推定している[23]。

第2節　地域的個性

生徒の属性も，地域毎に大きく異なっている。

2011年度の全国夜間中学校研究大会の資料によると，首都圏では【新渡日系】（難民・その他の外国人）が約7割，10歳代が約5割と多く，男性も4割強を占める（表32）。これに対し，近畿圏では【日本系】と【在日コリアン系】が計約4割，60歳以上も約4割と多く，女性が全体の4分の3を占める。広島県では約7割が【中国帰国系】・20～60歳・女性である。

今回のアンケート調査結果でも，ほぼ同様の傾向がみてとれる（表33）。

すなわちまず首都圏では，【新渡日系】（65.7%）・10歳代（50.7%）がそれぞれ大きな位置を占め，男性も40.9%いる。

これに対し，首都圏以外の地方は，【新渡日系】以外の中高年・女性が多い。すなわち近畿圏では【在日コリアン系】と【日本系】（計58.1%）・60歳以上（58.7%）・女性（76.6%），広島県では【中国帰国系】（65.0%）・30歳～50歳代（70.0%）・女性（65.0%），そして各地に分散する自主夜間中学では【日本系】（64.7%）・60歳以上（59.8%）・女性（77.5%）がそれぞれ多い。

また，首都圏以外の地方では，各学校毎に生徒の基本属性が多様である（表34）。たとえば高齢の【在日コリアン系】が多数集中する学校，働き盛りの【中国帰国者】が多く集まる学校，多様な世代の【新渡日系】が学んでいる学校，そして多様な属性・多様な世代の生徒が混在して一緒に学ぶ学校など，各学校毎に個性・特徴があり，教育の意義・課題も学校毎に多様である。これに比べれば，首都圏の学校は比較的，どこも【新渡日系】の若年層の生徒が多数を占め，同質性が高い。ただしもちろん，【新渡日系】はその中に多様な国籍・出身地・言語の生徒を含んでおり，その意味では首都圏の方が多様性が高いともいえる。

以上のような生徒の属性にみる地域差の背景には，各地の行政・学校による入学資格制限をはじめとする対応の違いがある。しかしそれ以上に大きな背景は，日本経済・社会の地域構造とその変動である。すなわち若年層を中心とする【新渡日系】の定住外国人が急増した1990年代以降は，まさに日本列島で人・金・情報の東京一極集中が進んだ時期である[24]。これに対し，【在日コリアン系】が多数来日し，また日本列島の周辺部から都市部に多数の【日

表32　地区別・属性別生徒数（2011年）　（%）

		首都圏	近畿圏	広島県	計
日本	20歳未満	6.9	0.4	2.9	2.0
	20歳以上	7.1	17.3	11.4	1.0
	その他	22.9	4.1	-	3.6
	小計	16.2	21.8	14.3	20.3
在日韓国・朝鮮籍		1.1	18.9	-	14.4
引揚		12.2	22.9	68.6	21.1
難民		1.1	0.3	-	0.5
移民		-	1.5	-	1.1
その他の外国人		69.3	34.6	17.1	42.6
男性		41.8	24.5	31.4	28.9
女性		58.2	75.5	68.6	71.1
70歳～		4.2	24.4	-	19.1
60歳～		7.6	16.9	8.6	14.5
50歳～		7.1	13.6	14.3	12.0
40歳～		7.3	14.8	20.0	13.1
30歳～		7.6	13.7	31.4	12.5
20歳～		17.4	11.6	22.9	13.2
15歳～		48.9	5.1	2.9	15.6
合計		100.0	100.0	100.0	100.0
実人数（人）		524	1615	35	2174

注：性別と属性・年齢で人数合計が不一致。日本「その他」は帰化した者。
資料：『2011年度　第57回全国夜間中学校研究大会大会記録誌』より作成。

表33　地域別生徒属性　（%）

			公立			自主
			首都圏	近畿圏	広島県	
系	日本		10.7	24.8	15.0	64.7
	在日		6.0	33.3	-	9.8
	帰国		17.6	21.9	65.0	2.9
	新渡	中国	30.1	10.2	20.0	10.8
		他国	35.5	9.4	-	11.8
		小計	65.7	19.6	20.0	22.5
年齢	70歳～		5.4	36.5	-	37.3
	60歳～		8.4	22.2	10.0	22.5
	50歳～		7.5	13.0	25.0	12.7
	40歳～		6.3	10.8	20.0	8.8
	30歳～		5.7	6.3	25.0	6.9
	20歳～		14.3	4.6	20.0	8.8
	16歳～		50.7	5.5	-	2.0
性別	男性		40.9	22.8	35.0	22.5
	女性		59.1	76.6	65.0	77.5
計			100.0	100.0	100.0	100.0
実人数（人）			335	693	20	102

資料出所：実態調査より作成。

表34　地域別・学校の特質（公立）　（校）

各50%以上		新渡	日本	在日	帰国	多様
首都圏	20歳未満	6				
	30歳未満	3				
	多様な年齢層	1				
地方	30～50歳	1			3	1
	60歳以上	1	1	1	1	5
	多様な年齢層	2				4
計		14	1	1	4	10

資料出所：2011年度全国夜間中学校研究大会資料より作成。

本系】の低賃金労働者が流入したのは，戦前および戦後高度経済成長期であり，これは阪神工業地帯が最も活気に満ちていた時期にほかならない[25]。なお【中国帰国系】は主に1980年代以降に来日し，その1世（残留孤児等）の多くは首都圏への居住を望んだが，日本政府はこれを許さず，半ば強制的に全国各地に分散居住させた[26]。そこで1世に呼び寄せられた2世以降の世代を含む【中国帰国系】は，【新渡日系】の定住外国人ほど，首都圏に一極集中しなかった。

地方，特に近畿圏において顕著な学校毎の多様性・個性の背景にも，各地域の経済・社会構造の差異がある[27]。【在日コリアン系】が生徒の圧倒的多数を占める学校は，日本最大の在日韓国朝鮮人コミュニティの近隣にある。【中国帰国系】または【新渡日系】の生徒が集まっている学校は，いずれも製造業の集積地で，外国人・不熟練労働者が多数，居住する地域に位置する。そして多様な系・多様な世代の生徒が混在してともに学んでいる学校は，近畿の各地方に幅広く分散している。

第3節　夜間中学の本質的共通性

ただし，ここで同時に見逃してはならないことは，夜間中学の最も本質的な意義・特質は，首都圏と地方，公立と自主の違いを越えて共通しているという事実であろう。

すなわちまず第1は，生徒のトランス・ナショナリティである（表33）。公立では地域を問わず，【日本系】以外が圧倒的に多い。自主でも，35.3%の生徒は【日本系】以外である。夜間中学の教育には，日本国民の権利だけでなく，国籍・文化を越えた，普遍的人権としての学習権の裏付けが不可欠である。

第2に，生徒の多くは経済的貧困層で，無職または不安定な非正規雇用の労働者である（表35）。「経済的に苦しい」，「将来の生活が不安」等，経済的困難に悩んでいる。学齢期に学校に行けなかった理由も「経済的に苦しかった」が最も多い。夜間中学生の学習権を保障するには，高齢層の福祉，若年層の雇用安定，就学補助等の経済的支援が不可欠となっている。

第3は，生徒が，夜間中学の普通教育としての意義を高く評価していることである（表36）。細分化された日本語・各教科の知識習得にとどまらず，多岐にわたる諸領域，全人格的・包括的な人間発達の保障を，生徒は高く評価している。また夜間中学で出会った友達・教師は，生徒の生活を支える社会関係の中軸・「最後の砦」となっている。

第4に，生徒達は，居住地・形式的学歴・経済的貧困等の壁を打破し，より多くの人々に実質的な学習権を，しかも公的に保障することを要望している。「夜間中学があることを，もっとたくさんの人に知らせてほしい」，「中学を卒業した人も，入学させてあげてほしい」，「奨学金・就学援助金がほしい」といった要望は，公立と自主・各地域の違いを問わず，多く聞かれる。

そして第5に，生徒達は，夜間中学の内部だけでは完結しない将来への足掛かりを模索している。近畿圏でも首都圏と同様，進学希望者は少なくない。首都圏でも，高校進学後，本当に安定した職業につけるかどうかは未知数である。総じてどの地域でも，卒業後の進路開拓は切実な課題となっている。

以上の5点は，首都圏と地方，公立と自主の違いを越え，夜間中学全体に共通する本質的特徴である。

表35　地域別，公立・自主別，生徒の生活　（MA）（%）

		公立			自主
		首都圏	近畿圏	広島県	
日本語読み書き	Ⅰ	6.0	7.8	-	11.8
	Ⅱ	18.8	30.3	20.0	32.4
	Ⅲ	53.7	42.7	30.0	43.1
	Ⅳ	20.0	14.7	50.0	10.8
	Ⅴ	-	0.4	-	-
仕事	自営	1.8	4.5	-	5.9
	正規雇用	3.3	3.3	-	4.9
	非正規	33.7	24.1	25.0	29.4
	その他	1.2	0.6	-	2.0
	無職	58.5	62.8	75.0	56.9
生活悩み	日本語	39.1	25.8	60.0	15.7
	読み書き	20.0	34.5	40.0	28.4
	貧困	25.4	27.7	35.0	18.6
	将来不安	18.2	28.1	30.0	24.5
	仕事悩計	27.8	16.3	25.0	19.6
	自分健康	11.6	41.0	45.0	44.1
相談相手	同居家族	58.5	43.1	65.0	44.1
	別居家族	18.2	30.0	35.0	30.4
	夜中友達	28.1	29.1	20.0	31.4
	夜中先生	20.6	37.4	35.0	34.3
不就学理由	貧困	28.4	37.7	65.0	35.3
	戦争	6.0	28.4	5.0	25.5
	日本不在	22.4	24.2	10.0	6.9
計		100.0	100.0	100.0	100.0

注：生活の悩み・相談相手・卒業後進路・不就学理由＝計20%以上の項目のみ掲載。
資料出所：実態調査より作成。

第5章　変動局面としての現在

第1節　過去10年間の推移

そして今，夜間中学は，大きな変動局面にさしかかっている。2000年以降，生徒数は急速に減少し，公立では2010年までに全国で約1000人減った（表37）。【日本系】・【在日コリアン系】・【中国帰国系】が高齢化で激減し，【新渡日系】・10歳代の生徒だけが増加してきたが，それも首都圏に集中し，他の地方では生徒の減少が顕著である。

第2節　【新渡日系】にみる地域差

近年増加してきた【新渡日系】の生徒も，その質は地域毎に明らかに異なっている（表38）。

まず首都圏の【新渡日系】は，10歳代（63.6%）の若者が特に多い。首都圏，特に東京は，グローバリゼーションの中で一定の「世界都市」化を遂げ，第三次産業（サービス業・商業）を中心に労働市場が活性化してきた。首都圏の生徒達は，不安定な非正規雇用で働いているが，しかしそれでも通学時間1時間以上を含む広域的な労働市場の中で，将来の職業移動・階層上昇を模索し得ている。第三次産業の職場は，固定的な勤務時間シフトが組みやすいので，学校の遅刻・欠席も少ない。職場で，日本人と会話する機会もある。こうした中で生徒達は，夜間中学に2～3年在籍し，できるだけ早く卒業して，昼間の学校を含む高校・専門学校

表36　地域別，公立・自主別，生徒と中学の関係　（MA）（%）

		公立			自主
		首都圏	近畿圏	広島県	
よかったこと	識字	58.8	63.6	70.0	56.9
	友達	57.0	55.1	55.0	62.7
	先生	65.4	81.7	85.0	76.5
	計算	21.2	32.8	25.0	38.2
	多様科目	33.7	49.5	55.0	36.3
	安心質問	33.1	49.4	30.0	52.0
	自信	27.8	46.6	50.0	36.3
	前向き	35.2	49.5	50.0	54.9
	考える	21.2	39.4	30.0	44.1
	生きる知	29.9	43.9	40.0	43.1
	同じ人	25.7	44.6	50.0	41.2
	違う人	42.4	50.6	40.0	61.8
	生きがい	25.4	47.2	40.0	42.2
	勉強喜び	54.9	72.3	60.0	67.6
	行事	46.0	57.7	65.0	52.9
	悩み忘れ	28.7	50.9	50.0	45.1
	中卒資格	24.2	28.1	45.0	9.8
	将来有用	30.1	18.3	35.0	13.7
	日本語	51.9	44.6	35.0	35.3
	日本社会	42.7	47.5	55.0	34.3
改善要望	周知	32.2	49.6	35.0	52.0
	中卒受入	21.2	23.2	45.0	16.7
	奨学金	23.0	34.9	30.0	18.6
	日語学級	20.3	23.1	45.0	15.7
	在学延長	16.4	33.3	40.0	20.6
	給食	9.3	36.1	25.0	13.7
	施設	4.8	18.1	5.0	20.6
	相談小計	16.1	12.7	20.0	13.7
	外語教員	16.7	15.7	25.0	13.7
	授業内容	10.1	17.9	10.0	18.6
	先生増員	4.2	16.6	-	12.7
	交流	13.4	15.4	15.0	18.6
	近隣開設	11.9	14.1	5.0	18.6
	公立設立	-	-	-	21.6
	近公小計	11.9	14.1	5.0	33.3
卒業後進路希望	夜高進学	32.8	25.4	35.0	14.7
	進学小計	58.8	31.0	40.0	20.6
	識字日語	15.2	29.9	40.0	18.6
	在学延期	11.3	33.0	40.0	28.4
計		100.0	100.0	100.0	100.0

注：よかったこと＝「その他」「なし」「無回答」を除いて掲載。
　　改善要望＝計10%以上の項目のみ掲載。
資料出所：実態調査より作成。

等に進学したいと強く願っている。このように高い進学率・出席率が数字で示されれば，行政も夜間中学の意義を評価しやすく，日本語特別クラス・充実した給食・施設も維持されやすい環境が生まれる。

これに対し，近畿圏では，【新渡日系】でも30歳以上（65.4%）が多い。学校の近隣・地元にある地場製造業の零細企業で，いわゆる３Ｋ（きつい，汚い，危険）労働に従事している。これらの職場は，グローバリゼーションの下で壊滅的打撃を受けつつあり，労働時間は不規則に変動し，残業が集中するかと思えば，仕事のない期間が続くこともある。雇用も不安定で，倒産・解雇に遭遇することも多い。そこで時間どおりの恒常的な通学が困難となる。「毎朝５時に出勤，夕方５時か６時まで仕事。仕事はすごくきつく，ケガも日常茶飯事。仕事が終わって学校に駆けつけても遅刻する。それでも私達は必ず毎日学校に行き，絶対に学校を続ける

表37　生徒数推移（公立）　（人）

			1999	2010	2011
生徒属性	日本人	若年	45	39	43
		中高年	691	358	321
		その他	15	55	78
	在日韓国朝鮮人		998	348	312
	移民		50	30	24
	難民		48	25	11
	引揚帰国		1131	544	458
	その他外国人		458	1089	927
生徒年齢	70歳～		666	445	416
	60歳～		669	352	316
	50歳～		334	272	261
	40歳～		397	303	284
	30歳～		454	332	233
	20歳～		695	338	286
	10歳～		221	446	339
地区別	東京		525	576	431
	神奈川		40	56	48
	千葉		42	46	45
	京都		90	49	46
	大阪		2094	1321	1206
	奈良		360	225	212
	兵庫		160	152	151
	広島		125	63	35
計			3436	2488	2174

資料出所：『1999年度・2010年度・2011年度　全国夜間中学校研究大会大会記録誌』より作成。

決心をしている（＊）」，「急の残業で仕事と学校の時間が重なり，どうしても学校に影響する」。通学時間30分未満の狭隘な地元労働市場の中では，将来の職業移動・階層上昇の展望も見えにくく，いわば生活困窮の袋小路に陥っている。そこで夜間中学の卒業は，「未来への旅立ち」というより，「学びの場の喪失」でしかない。そのため近畿圏の生徒には３年以上在籍し，さらに在学延長を望む声も多い。行政は，こうした実態を「日本語学校のようだ」と誤解しがちである[28]。これは前述のように全くの誤解だが，しかしその誤解はしばしば，卒業年限の機械的な規制，給食の廃止，就学援助の削減・廃止といった行政の消極的姿勢・管理強化の理由または口実になりやすい。地場産業の衰退による税収減・生活保護率の上昇は，地方財政を圧迫し，夜間中学への公的支出削減に拍車をかける。近畿圏の生徒には，給食・在学延長・施設改善・日本語特別クラスの設置等の要望が特に多いが，そこにはこうした背景がある。

そして近畿圏以外の地方では，そもそも【新渡日系】の生徒の増加自体が限られている。地場産業の衰退が一層激しく，地元に労働市場がないからである。

第３節　地域的多様性の規定要因

こうした実態をふまえれば，「首都圏＝先進，地方＝後進」，「首都圏＝地方の未来像」といった単線的な見方はとても通用しない。つまり「将来的に，すべての地方が首都圏と同じようになる」という単線的な見方は，あまりに非現実的といわざるをえない。

むしろ現在の夜間中学の地域的多様性の根底には，日本経済全体の衰退，世界の中での相対的な地位低下，その中で進む東京一極集中，地方産業の崩壊，特に近畿圏の地盤沈下がある。いわば

表38　【新渡日系】：首都圏と近畿圏の比較　（MA）（%）

			首都圏	近畿圏
年齢	70歳～		-	1.3
	60歳～		1.4	7.1
	50歳～		4.5	16.0
	40歳～		5.5	25.0
	30歳～		5.9	16.0
	20歳～		16.4	14.7
	16歳～		63.6	19.9
性別	男性		39.5	24.4
	女性		60.5	75.6
在籍年数	3年以上		7.7	30.8
	2年		33.2	20.5
	1年		50.9	42.9
通学時間	60分～		30.5	11.5
	30分～		35.0	39.7
	30分未満		32.3	48.1
改善要望	施設		5.0	13.5
	日語学級		19.1	36.5
	在学延長		15.5	28.2
	給食		7.7	21.2
卒業後	進学	夜高	38.2	28.2
		昼高	27.3	7.1
		専学	10.0	9.0
		他	-	0.6
		小計	65.9	38.5
	就職		29.1	23.1
	識字日語		11.4	25.0
	在学延期		10.0	20.5
将来不安	進学困難		35.5	19.2
	就職困難		19.1	8.3
	日語不学		17.7	36.5
計			100.0	100.0

資料出所：実態調査より作成。

グローバリゼーションに伴う地域間格差の拡大が，夜間中学の多様性を生み出しているのである。

第6章　夜間中学の未来のために

第1節　生徒はどう変わる？

夜間中学が今後，どう変わるのか。それを正確に予測することは，もとより不可能である。しかし，この間の東京一極集中が，日本経済全体の衰退・日本の相対的地位低下の中で進んできたことをふまえれば，今後，東京・首都圏も含め，新渡日外国人の流入・定住が減少に転じる可能性は高いと思われる。すでに留学・技能実習等の分野では，それが現実になっている。1990年の入国管理法改正以降，夜間中学で20年間続いてきた【新渡日系】の増加は，終焉にさしかかっているのかもしれない。なお2011年度，首都圏の【新渡日系】・若年層の生徒が初めて減少に転じた（表37）。これが東日本大震災の影響による一時的なものか，それとも前述の予測が本格的に始まったのか，2012年度以降の動向に注目する必要がある。

第2節　歴史と現状をふまえて

しかしいずれにせよ，夜間中学の歴史と現状をふまえれば，このような変化それ自体はとりたてて目新しいものではない。夜間中学の60余年の歴史，および今回のアンケート結果をふまえれば，次のことは明白である。

まず第1に，変化は常態である。夜間中学の生徒の質は，これまでも約10年毎に大きく変化し，夜間中学はそれを柔軟に受けとめてきた。夜間中学の史的変遷については序章第3節で簡単に触れ，また詳細には別稿を用意するが，各時期の生徒数の推移，および増加した生徒の属性をごく概括的に示せば，表39・40の通りである。

第2に，変化の起点は，夜間中学の内部にはなく，地球規模の社会構造変動にある。第二次世界大戦の敗戦・植民地解放，東西冷戦・南北格差，そしてグローバリゼーション。夜間中学生の質の変化は，ポスト・コロニアル時代の地球規模の巨大な社会構造変動の一コマにすぎない。したがって生徒が直面する問題は，小手先・学校内の対応で解決できるものではない。そうした中で学校・教師側に求められるのは，抱え込まず，投げ出さず，今／ここを変えることで世界を変える“think globally, act locally”の姿勢であろう。

第3に，夜間中学を存続させ，夜間中学のあり方を決定してきた最大の主体は，生徒自身である。1947年以来，どの時代にも，夜間中学を必要とした人々がいた。それは戦後の各時期の日本社会で疎外・抑圧されてきた人々である。「夜間中学生になること」は，誰に強制されたのでもなく，彼・彼女らの「生命＝生活（life）」の必要に基づく主体的選択であった。そして夜間中学は，彼・彼女らの「生命＝生活」の必要に応える形でそのつど大きな変貌を遂げ，その変貌を通して初めて存続してきた。グローバリゼーションが一層進展する中，さらなる格差拡大・人間疎外が進もうとしている。自らの「生命＝生活」に基づいて夜間中学を必要とする新たな人々は，必ず登場する。今回のアンケート回答者には，戸籍をもたなかったため，学校に通えなかった若い【日本系】の生徒が数名，含まれていた。こうした人々が今後，全国各地で増加

表39　学校数・生徒数の推移　（校・人）

	1947	1955	1968	1979	1989	1999	2010
学校数	1	84	21	31	34	34	35
生徒数	14	5208	416	2769	2547	3436	2488

出所：全国夜間中学校研究大会資料より作成。

表40　夜間中学・生徒の変遷

年次等		増加した生徒の属性	生徒総数
第1期	1947～55・戦後混乱期	学齢・長期欠席者	急増 ↗
第2期	1956～68・高度経済成長期	学齢超過・若年労働者	急減 ↘
第3期	1969～79・ポストコロニアル移行期	在日韓国朝鮮人，韓国・中国帰国者，障碍者，不登校経験者	急増 ↗
第4期	1980～89・日本社会の「国際化」期	在日韓国朝鮮人，中国帰国者，新渡日外国人（特に難民・移民）	維持 →
第5期	1990～99・脱国家・グローバル期	新渡日外国人，中国帰国者（二世等）	増加 ↗
第6期	2000～10・日本衰退・東京一極集中期	新渡日外国人（その他の外国人）	減少 ↘

出所：全国夜間中学校研究大会資料より作成。

することはほぼ間違いない。また学齢期に不登校になり，その後，「引きこもり」の人生を歩んで来た膨大な人々――すでに青壮年に達した人も含め――が今，開かれた居場所と生き方を変えるチャンスを模索している。人生の途中で来日した【新渡日系】だけでなく，外国にルーツをもちながらも日本に生まれ，日本語を母語とし，またはセミリンガルの生徒達も，今後，ますます増加するだろう。

以上をふまえて第4に，今後の夜間中学の存続・発展にとって大切な観点として，暫定的ではあるが，次の5つを提起したい。

一つ目は，ポスト・コロニアル世界の中で抑圧・疎外されている人々の状態・動向に，関心をもち続けること。

二つ目は，彼・彼女らが夜間中学に入りやすい環境を作り続けること。そのための一つの方法として，普遍的人権としての学習権に依拠し，それを保障する国家・行政の公的責任を問い続けること。

三つ目は，どんな属性（国籍・年齢・学習歴・能力等）の人も排除せず，各地域の多様性に即して，今／ここにいる生徒の「生命＝生活（life)」の必要に応え，実質的な学習を保障すること。つまり，生徒が学校に適応するのではなく，学校が生徒に適応すること。

四つ目は，夜間中学が，全人格的・普遍的な人間発達を目指す普通教育であり続けること。細分化された専門科目の知識や，道具的・手段的な日本語の習得それ自体を教育の目的にしないこと。

そして五つ目は，学校・教師が，生徒を「教室内での生徒」ではなく，「一人の生きた人間」と捉え，生徒達が苦闘している学校外の社会問題に積極的に関与すること。生徒の苦難を個人的能力（学力・日本語能力等）の問題に矮小化せず，社会的・共同的な解決課題と捉え，地域の雇用，福祉，行政の改善に能動的に関与すること。

以上の5つの観点はいずれも，特に目新しい観点ではない。生徒達が，「夜間中学に通ってよかった」，「もっとこうしてほしい」と感じ，アンケートで答えてくれた内容にほかならない。

第3節　夜間中学の歴史・社会的意義

ただしこれらの5つの観点は，いじめ・不登校・校内暴力・学級崩壊，格差・貧困の拡大といった危機に直面している昼間の義務教育においても，今，最も必要とされているように思われる。また生徒のトランスナショナル化，ノーマライゼーションへの対応も，昼間の義務教育において――夜間中学に比べれば遥かに遅滞しているとはいえ――，切迫した課題となりつつある。

実際，こうした昼間の義務教育の危機や課題が，①学校の内外で抑圧・疎外されている人々の状態・動向に関心をもたず，②人権としての学習権を保障する国家・行政の公的責任を明確にせず，③今／ここにいる生徒の「生命＝生活」の必要に応えず，強権的・形式的な管理強化によって，④全人格的・普遍的な人間発達を求める普通教育を軽視し，細分化された専門知識の競争的習得に走って，⑤学校・教師が，生徒の学校外での生活や将来に無関心でいて，解決可能かと問えば，答えはいずれも「否」といわざるをえない。

そして夜間中学は，日本の義務教育機関の中では，こうした5つの観点を最も重視してきた学校であると思われる。だからこそ生徒がこれほど夜間中学の教育を高く評価し，また法的基礎の脆弱さにもかかわらず，夜間中学は「なくてはならない学校」として60余年にわたり，維持・存続されてきたのである。

したがって，日本の義務教育が現在，直面している危機を乗り越え，今後も存続・機能していけるとすれば，そのヒントは夜間中学の教育実践の中にあるといえよう。夜間中学は，既存の日本の学校・義務教育制度を不動の前提としてその内部に構築されたアジールではない。むしろ現在，国民主権と能力主義を自明の原理とする戦後の日本の学校・義務教育制度そのものが，根底から揺らぎ，存続の可否が問われつつある[29]。夜間中学は，こうした巨大な歴史的転換の最先端に立っているといってよい。夜間中学の実践は，単に一般の義務教育を受けられなかった国民に対する補償，つまり過去の清算だけにとどまらず，むしろポスト・コロニアルの新時代の学校・義務教育の再構築に向けた模索の一つである。

そして人類は今，ポスト・コロニアル時代の黄昏という歴史の転換期を生きている。そこでは序章でも述べたように，国籍と能力という「2つの壁（＝近代における差別・排除の最後の境界線）」の克服が大きな課題として立ち現れている。その彼方には，国民主権・民族自決をも乗り越えた，人類がこれまで経験したことのない新たな世界社会が見通せる。夜間中学での生徒の日々の学習，および国籍・能力を問わない普遍的人権としての学習権の公的保障という教育実践がもつ意義は，単に日本という一国家の義務教育の再構築にとどまらない。より大きな歴史的社会変動・変革に向けた日常的実践の一環でもある。「ミネルヴァの梟たち」は今夜も黙々と，国籍・能力による差別・排除の壁を掘り崩しつつある。

補注

1）『2011年度　第57回全国夜間中学校研究大会大会資料』によれば，調査当時，公立夜間中学は全国に35校あり，2174名の生徒が在籍していた。今回の調査では，横浜市の5校を除き，すべての公立夜間中学の協力を得た。公立夜間中学の生徒総数における回答率は48.2%である。

2）自主夜間中学は，各校毎に多様な形態・名称をもち，厳格な定義が難しい。ただし，『2011年度　第57回全国夜間中学校研究大会大会資料』所収の「関係諸グループ一覧」には31校が掲載されている。今回，協力を得た自主夜間中学は，この中の10校である。

3）これに先立ち，2009年9～11月，近畿圏全域の公立夜間中学でもアンケート調査を実施し，18校・747名の生徒から回答を得た。この結果については，浅野慎一（2011）「夜間中学の意義と課題」神戸大学大学院・浅野研究室を参照。なお本稿では，2009年調査のデータの事例を使用する際，（＊）印を記した。

4）浅野慎一（2005）『人間的自然と社会環境－人間発達の学をめざして』大学教育出版，第3部第2章，浅野慎一編著（2007-b）『増補版　日本で学ぶアジア系外国人』大学教育出版，第1部第2章。

5）ルナン，E.（1997）「国民とは何か」ルナン，E.他『国民とは何か』インスクリプト，62頁。

6）浅野（2007-b）『前掲』第1部第1章，同（2005）『前掲』第1部第7章，同（1998）『新版　現代日本社会の構造と転換』大学教育出版，第1部第1章を参照。

7）ヘーゲル，G．W．H．（1983）『法の哲学』論創社，13頁。

8）実際の呼称は，夜間教室，夕間学級等，多様だったようである。

9）黎明期の夜間中学の文化・理念・実態は，第55回全国夜間中学校研究大会実行委員会大会事務局（2009）『神戸市夜間中学校60年をふりかえって』に読み取れる。

10）高野雅夫（2004）『夜間中学生　タカノマサオ』解放出版社，第6章を参照。

11）例えば，ウォーラーステイン，I．（1993）『脱＝社会科学』藤原書店，35〜36・143頁，同（2001）『新しい学』藤原書店69・93頁等。

12）マルクス，K．（1959-a）「ヘーゲル法哲学の批判から」『マルクス・エンゲルス全集』1巻，大月書店，同（1959-b）「ユダヤ人問題に寄せて」『同全集』1巻，大月書店等。浅野慎一（2007-a）「市民社会・人権・都市」有末賢・北川隆吉編著『都市の生活・文化・意識』文化書房博文社。

13）浅野（1998）『前掲』第8章。

14）浅野慎一・佟岩（2006）「中国残留孤児の労働・生活と国家賠償訴訟」『労働法律旬報』1633，同（2009）「血と国」『神戸大学大学院人間発達環境学研究紀要』3－1，浅野慎一（2009-b）「中国残留日本人孤児にみる貧困」『貧困研究』3，佟岩・浅野慎一(2010)「祖国と越境」『神戸大学大学院人間発達環境学研究紀要』3－2。また中国社会主義については，浅野慎一（2009-a）「現代マルクス主義の方法と産業・労働社会学」浅野慎一編著『現代社会論への社会学的接近』学文社，35〜37頁。

15）「ユネスコ　学習権宣言」（1985年）より。ポスト・コロニアルの歴史・平和教育は，反帝国主義・民族自決の歴史観を前提とした知識の一方的教授として行うことは困難である。例えば，中国と台湾の出身の生徒がともに学ぶクラスで東西冷戦をどう教えるか，戦後高度成長期に来日した在日コリアンの生徒に戦後の日韓関係をどう教えるか，解放後のベトナムから逃れてきたベトナム難民の生徒に民族自決をどう教えるか，展望の見えない貧困から脱出してきた中国農村出身者にグローバリゼーションをいかに教えるか，そして日本で生徒達が現に体験しつつある貧困・疎外の世界史的背景をどう教えるか。ここでは，生徒の実体験をふまえたポスト・コロニアルの歴史観の再構築が求められている。

16）学校は，近代社会において人間発達の保障それ自体を目的とする唯一のアソシエーションであるという一点で，他の社会組織と代替できない。人間発達それ自体は，学校以外の場でも実現される。例えば，①文化習得，②アイデンティティ確立，③ライフスキル提供等は，学校以外（職場・地域・家庭）でも十分に可能である。現に【日本系】や【在日コリアン系】等の高齢者は，夜間中学に入学する以前から，固有の文化やアイデンティティ，ライフスキルを経験知として学び，創り出してきた。それらは学校や教師によって与えられるものではない。また現実の学校が，人間発達の保障それ自体を目的とする機関として実際に機能しているかといえば，多くの疑問を感じざるを得ない。しかし少なくとも学校は，人間発達の保障それ自体を目的とする近代的アソシエーションであるという一点で，職場・地域・家族等と異なる。また学校では，現実社会の現場で習得しうる個別具体的な経験知にとどまらない普遍的な理論知の世界が提示される。学校教育に固有の意味があるとすれば，それはこうした学校という空間で，人生の一定期間，学習－生活を保障されることにより，自らの生活・生き方を対象化し，考えることができるという点にあるといえよう。特定分野に特化した専門教育以上に，普通教育・義務教育においては，そうした観点が特に重要であろう。なお「人間発達（human development）」の概念とその把握の方法については，浅野慎一（2005）『前掲』第3部を参照。

17）浅野・佟（2006）「前掲」，同（2010）「前掲」，浅野（2009-b）「前掲」，佟・浅野（2010）等。

18）浅野（2005）『前掲』第1部第2章・第4章，ポパー，K．R．（1971）『科学的発見の論理』上下，恒星社厚生閣。

19）『第36回　全国夜間中学校研究大会資料』1990年度，5頁等。

20）浅野慎一（2006）「『疎外された労働』とヒトの発達・進化」中川勝雄・藤井史朗編著『労働世界への社会学的接近』学文社，同（2005）『前掲』第3部第3章。なお，2006年の日本弁護士連合会「学齢期に修学することのできなかった人々の教育を受ける権利の保障に関する意見書」（2006年度　第52回全国夜間中学校研究大会大会資料所収）は，人権・学習権の立場から夜間中学校の発展の必要を基礎づけたものであり，実践的に重要な価値をもつ。ただしそこでも18歳以上の新渡日外国人の義務教育については，日本国に対する「権利」とまではいえないと述べざるを得なかった。国家の公共性を前提とした近代的権利論は，こうした排他性を免れない。これに対し，生徒が求める人間的発達は，より普遍的で，18歳以上の新渡日外国人にも当然保障されるべき内容であると思われる。

21）浅野慎一「中国残留日本人・日系人と夜間中学」『2009年度第55回全国夜間中学校研究大会大会記録誌』32頁を参照。また外国人労働者にとっての日本語習得のもつ意義と限界については，浅野慎一・今井博（2003）「出稼ぎブラジル人と日本人の労働と文化変容」『日本労働社会学会年報』第14集，140頁，浅野（2007-b）『前掲』512頁等。

22）異文化理解・多文化共生は，ポスト・コロニアルの支配様式である。異化と同化はいずれも近代的な差別・抑圧（「取り込みながら排除する」）の手法であり，同化の強制への一面的な批判は，異化に基づく排除を容易に免罪する。重要なことは既存の文化の理解・尊重にとどまらず，その基底にあり，それらを作り出している生活・労働・経済の現状に対する批判的視点であろう。

23）全国夜間中学校研究会（2008）「すべての人に義務教育を！21世紀プラン」『2008年度　第54回全国夜間中学校研究大会大会資料』所収。

24）浅野（1998）『前掲』第6章参照。

25）浅野慎一・岩崎信彦・西村雄郎編著（2008）『京阪神都市圏の重層的なりたち』昭和堂，第3部参照。

26）浅野・佟（2010）「前掲」213頁。

27）近畿圏の各校の教育的意義の多様性については，浅野（2011）「前掲」。

28）『毎日新聞』2010年１月16日で，奈良県御所市教育委員長は，夜間中学で行われているのは「現状では，日本語教育ばかり」と指摘し，「夜間中学の役割はほとんど終わっているのではないか」と述べる。実態と乖離した，極めて表面的な現状認識といわざるを得ない。『毎日新聞』2008年７月１日，2010年１月16日等参照。

29）学校教育の目的も，「（日本）国民の育成（教育基本法第１条）」と，より普遍的・多元的な人権の狭間で揺れ動かざるをえない。